

八幡中原遺跡 4

－宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2013

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所

八幡中原遺跡4

一宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査一

2013

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所



道跡から観音塚古墳等を望む（北東から）



古墳時代中期の住居跡（S I - 3）



古墳時代中期のカマド掘り方（S I - 3）



古代の区画溝跡（S D - 1・2）



基本層序

例 言

1. 本書は、宅地分譲に伴う八幡中原遺跡第4次調査の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県高崎市八幡町字中原 1276 番 4 に所在している。
3. 本調査および整理作業は、事業者・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、株式会社榛名土地に負担して頂いた。
5. 発掘調査は、高橋清文（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 発掘調査・整理作業は、平成 24 年 6 月 18 日～平成 25 年 2 月 28 日の期間で実施した。
7. 本遺跡は高崎市教育委員会の遺跡番号で「544」に相当する。
8. 本書の執筆については、1 を田口一郎（高崎市教育委員会）、Ⅳ-2 を山本千春（有限会社毛野考古学研究所）、それ以外を高橋が行った。出土遺物に関しては山本が担当した。
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

大島郁美 狩野友好 北野進二 小関泰洋 齋藤清一 佐藤岡雄 志村久子 森山孝男

【整理作業】

池内麻美 石丸敦史 井上太 小野沢絹子 合田幸子 菅谷万須美 関小百里 武士久美子
竹中洋治 常深尚 伴場りく 深谷道子 真下弘美 山口昌子 山本良太

11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力賜った。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略、順不同）
高林真人 前原豊 水谷貴之 J T 空撮 山下工業株式会社

凡 例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構略称は、堅穴住居跡：S I、掘立柱建物跡：S B、溝跡：S D、土坑：S K、小穴（ピット）：P とした。
3. 遺構図および遺物実測図の縮尺については図中にスケールを付して表示した。また、遺物写真は遺物実測図とは同縮尺である（一部変更）。
4. 遺構平面図の小穴脇に配した「-」は深さを、断面図中の「P」は土器、「S」は礫を示す。
5. 土器の色調観察は「新版 標準土色帖」（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）を用いた。
6. 土層説明における含有物の量は、大量（50%以上）・多量（50～30%）・少量（30～5%）・微量（5%以下）と表記した。
7. 本文・表中における（ ）内の数値は復元値、[] は残存値を示す。
8. 本書掲載の第1図は、高崎市発行 1/2,300「高崎市都市計画基本図」、第2図は、国土地理院発行 1/200,000地勢図「長野」・「宇都宮」、第3図は、国土地理院発行 1/25,000地形図「高崎」を、一部改変引用した。

目次

巻頭写真 例言 凡例 目次

I 調査に至る経緯	1	4 溝跡	34
II 遺跡の環境	2	5 土坑	39
1 地理的環境	2	6 小穴（ピット）	41
2 歴史的環境	2	7 遺構外出土遺物	41
III 調査の方法と経過	5	VI まとめ	42
IV 基本層序	5	1 堅穴住居跡について	42
V 検出された遺構と遺物	7	2 古墳時代中期の出土遺物について	42
1 遺跡の概要	7	3 古代の遺構について	43
2 堅穴住居跡	7	報告書抄録 写真図版	
3 掘立柱建物跡	32		

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第16図 S1-4 (1)	18	第31図 SB-1 (1)	32
第2図 遺跡の位置	2	第17図 S1-4 出土遺物	18	第32図 SB-1 (2)	33
第3図 周辺の道路	3	第18図 S1-4 (2)	19	第33図 SB-2 (1)	33
第4図 基本層序	5	第19図 S1-5 (1)	20	第34図 SB-2 (2)	34
第5図 調査区全体図	6	第20図 S1-5 (2)	21	第35図 SD-1	34
第6図 S1-1 (1)	7	第21図 S1-5 出土遺物 (1)	22	第36図 SD-1 出土遺物	35
第7図 S1-1 (2)	8	第22図 S1-5 出土遺物 (2)	23	第37図 SD-2	36
第8図 S1-1 出土遺物 (1)	9	第23図 S1-5 出土遺物 (3)	24	第38図 SD-2 出土遺物	37
第9図 S1-1 出土遺物 (2)	10	第24図 S1-6 出土遺物	26	第39図 SD-3・4・5	38
第10図 S1-2	11	第25図 S1-6	27	第40図 土坑	40
第11図 S1-2 出土遺物	12	第26図 S1-7	28	第41図 遺構外出土遺物	41
第12図 S1-3 (1)	13	第27図 S1-7 出土遺物	29	第42図 周辺の調査状況	43
第13図 S1-3 (2)	14	第28図 S1-8 (1)	30	第43図 周辺における古代の変遷	44
第14図 S1-3 出土遺物 (1)	15	第29図 S1-8 (2)	31		
第15図 S1-3 出土遺物 (2)	16	第30図 S1-8 出土遺物	31		

写真図版目次

PL1 遺跡全景	S1-4 カマド掘り方	PL6 SB-1・2	SK-2
遺跡全景	PL4 S1-5	SB-1	SK-5
PL2 S1-1	S1-5 埋没状況	SB-1 P2 埋没状況	SK-10
S1-1 遺物出土状態	S1-5 遺物出土状態	SB-2	SK-11
S1-1 カマド	S1-5 出土須臾器	SB-2 P1 埋没状況	
S1-1 床下土坑	S1-5 カマド	SD-1	PL9 S1-1・2 出土遺物
S1-2	S1-5 貯蔵穴	SD-1 埋没状況	PL10 S1-3 出土遺物 (1)
S1-2 出土土師器	S1-5 床下土坑	SD-1 遺物出土状態	PL11 S1-3 出土遺物 (2)
S1-3	S1-6	SD-1 出土円面便・須臾器	PL12 S1-5 出土遺物 (1)
S1-3 埋没状況	PL5 S1-7	SD-2 家側	PL13 S1-5 出土遺物 (2)
PL3 S1-3 遺物出土状態	S1-7 カマド	SD-2 西側	PL14 S1-5 出土遺物 (3)
S1-3 出土石製品	S1-7 掘り方	SD-2 埋没状態	S1-6 出土遺物
S1-3 掘り方	S1-8	SD-1・2 重複状況	PL15 S1-7 出土遺物
S1-3 カマド1	S1-8 遺物出土状態	PL8 SD-3	PL16 S1-8 出土遺物
S1-3 カマド2	S1-8 跡	SD-4	SD-1 出土遺物
S1-4	S1-8 カマド	SD-5	SD-2 出土遺物
S1-4 カマド	S1-8 カマド掘り方	SK-1	遺構外出土遺物

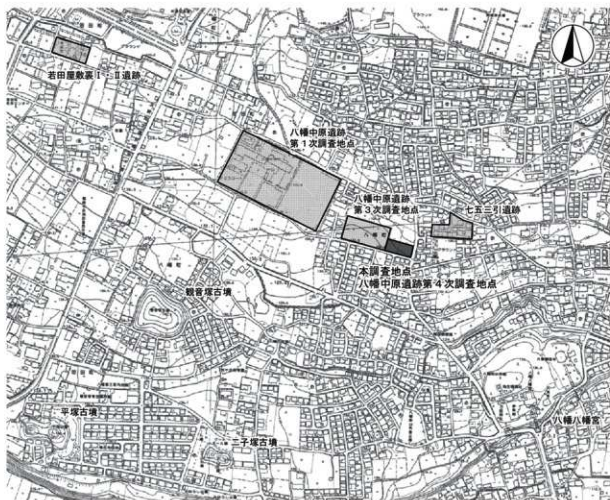
I 調査に至る経緯

平成24年4月26日に、八幡町中原地区において土木工事により土器等が出土しているとの通報が市教委文化財保護課にあり、職員が現地調査を実施したところ、当該地の周囲をトレンチ状に1m以上掘削してローム面まで達しており、複数の堅穴住居跡と推定される掘り込みや土器類の出土も確認された。当日は関係者が不在なため、連休を挟んで再度現地調査を実施し、事業者からの事情聴取と協議を行ない、以下の点が合意された。

- 1、既に掘削された部分については、記録作成を市教委が行う。
- 2、宅地造成工事に伴う無届の文化財保護法93条の提出と、その後の工事部分の取扱いについて別途協議を行う。

法93条の届出を受け、再度工事計画に基づき事業者と協議を行い、道路との取り付きの関係で駐車場部分における遺構面以下までの掘削が回避であることから、2箇所の駐車場建設部分に関して記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託することとなり、平成24年6月7日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成24年6月13日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 調査区位置図

Ⅱ 遺跡の環境

1 地理的環境

八幡中原遺跡は、北側を烏川低地帯、南側を碓氷川低地帯に挟まれた「八幡台地」上に立地する。八幡台地は、安中市の秋間丘陵から連続する第三紀系丘陵の先端部に当たり、その南北両側を流れる烏川・碓氷川によって急峻な河岸段丘が形成される。遺跡周辺の標高は、133～135mを計測し、碓氷川との比高差は20～30m程を擁する。台地は東側にある烏川と碓氷川の合流点へ向かって収束していくが、八幡中原遺跡の周辺では東西にのびる2本の小支谷によって北から「剣崎支台」・「若田支台」・「八幡支台」の3つに分けられる。本遺跡は若田支台の中央やや南側に位置する。

遺跡周辺は良好な日照量と温暖な気候をいかして古くから桃の生産が盛んであったが、近年は宅地造成が進んでおり、旧来の地形・地割の把握が困難になりつつある。

2 歴史的環境

本遺跡の周辺では、小支谷によって3つに区切られたそれぞれの台地に遺跡が密に分布している。ここでは支谷ごとに本遺跡と関連の深い古墳時代・古代を中心として記述していく。

八幡中原遺跡のある若田支台では、本格的に集落が営まれるのは古墳時代中期以降のようである。八幡中原遺跡第1次調査地点（第3図1）において、古墳時代中期から古代に至る拠点的な集落が確認されている。その範囲は西に約400mのところで調査された若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡（6）まで連続することが想定されており、非常に大規模な集落であったことが窺われる。その内容も、四周に溝を巡らせた掘立柱建物跡（3号掘立柱建物跡）や古墳時代後期の住居跡から出土した韓式系土器等が特筆される。一方、東接する同遺跡第3次調査地点（2）や七五三引遺跡（4）では礎石建物に持ちいられる大型礎や基壇状遺構および礎石建物群と集落を隔絶する大溝が確認されており、一般集落とは異なる性格を有している。



第2図 遺跡の位置

北縁の剣崎支台では、縄文時代からの集落が散在する。剣崎支台に若田支台が合する広い平坦面では若田原遺跡（9）において縄文時代中期中葉～後期初頭の拠点的な集落が検出されており、支谷の谷頭にある湧水点との関係が予想される。弥生時代の遺跡としては、剣崎長瀬西遺跡（10）があり、櫛描文系土器を主体とする弥生時代後期から古墳時代初頭の堅穴住居跡が多数検出された。引き続き古墳時代の集落とそれに伴う墳墓域も剣崎長瀬西遺跡が中心となる。そこでは韓式系土器が多く出土しており、5世紀中葉に位置付けられる住居跡から初現期のカマドが確認された。10号墳から出土した金製垂飾付耳飾など渡来系文物も多く見受けられる。古墳は多彩な副葬品を持つ剣崎長瀬西古墳（11）を筆頭に方形積石塚古墳を含む群集墳が広がっており、その分布は大島原遺跡（12）で確認された古墳群7基に連続するものと想定される。一方、若田原遺跡では若田大塚古墳（7）や檜ノ木古墳（8）など計7基が調査されており、接続する若田支台上にある集落との関係を考慮する必要がある。古代では剣崎稲荷塚遺跡（13～15）において平安時代の堅穴住居跡が調査され、11世紀代に位置付けられる2号住居跡から2体の小銅像が出土している。この剣崎支台の東側（豊岡支台）には、弥生時代の遺構が多く認められた引間遺跡群（17・19～21）や古代の大規模集落である豊岡後原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（22・23）がある。住居跡から出土した古銭や畿内系緑釉陶器等の出土状況から9世紀以降に隆盛したことが指摘されており、西側の支台と対照的な傾向にある。なお、生産遺構として、引間Ⅱ遺跡（17）・上豊岡引間Ⅳ遺跡（19）で浅間B軽石（A s - B、1108年降下）層下の畝状遺構、低地の引間Ⅲ遺跡（18）で同層下の水田跡が調査されている。

八幡支台には、地名の由来となる八幡宮が所在する。ここでは平塚古墳（28）をはじめ二子塚古墳（29）・観音塚古墳（30）など大型の前方後円墳が継続して築造されてきた。この台地において中核となるのは八幡遺跡（27）である。そこでは弥生時代後期から奈良・平安時代にわたる大量の堅穴住居跡が検出された。また、八幡六枚遺跡（25）では「片正郡」と線刻された須恵器甕片が住居跡から検出されており、当地周辺の郡名を顕示すると共に、片岡郡庁域との関係が想定されている。



第3図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査の方法と経過

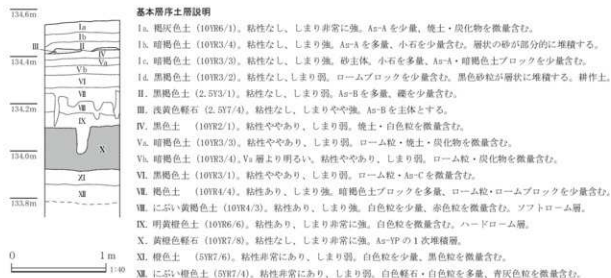
表土除去は0.25㎡バックホーを用いた（平成24年6月18・19日）。最初に、浅間B軽石層（Ⅲ層）下の調査を目指したものの、耕作痕による損壊が甚大であることから掘り下げを進めた。次に、浅間C軽石を含む黒褐色土層（Ⅵ層）上で遺構の検出を試みたが、弁別することができなかった。このような経緯を経て、ローム層との漸移層であるⅦ層上面を遺構確認面とした。表土除去後は、人力による遺構確認（6月18～20日）および遺構調査（6月20日～7月12日）を実施した。遺構はベルトないし半軌により土層堆積状況を記録している。終盤に、掘立柱建物跡の配列を確認する目的で3箇所の拡張を行った。なお、調査区は西側を1区、東側を2区と呼称している。

遺構の測量や写真記録は調査の進捗状況に応じて実施した。平面測量はトータルステーションで、断面測量は基準点からの測り込みによって作成している。写真記録は35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・デジタルカメラ（1,200万画素相当）を使用し、空撮はラジコンヘリコプターにより撮影した（7月5日）。

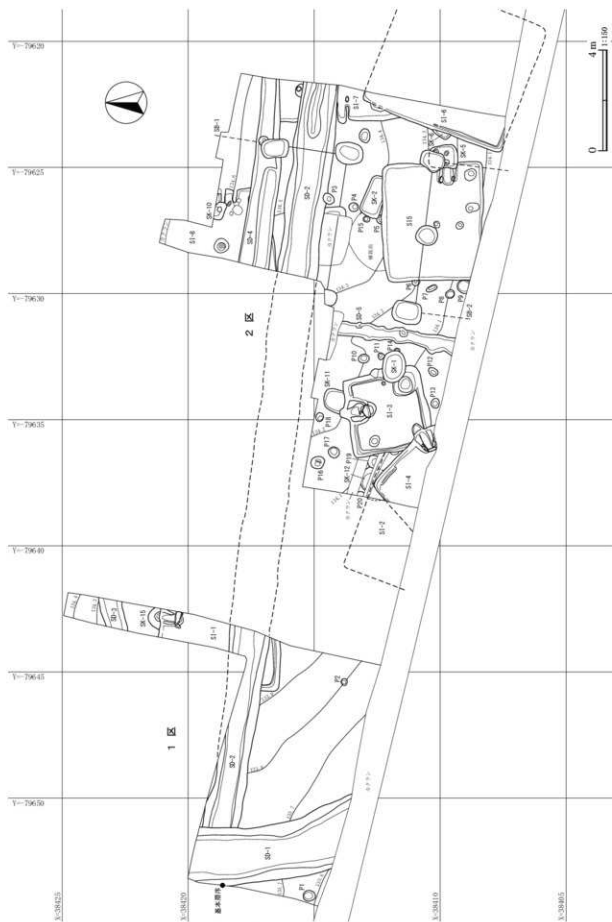
整理作業は遺物の洗浄・注記・接合および写真撮影・実測・トレース、遺構図作成等を経て、報告書の編集・印刷・校正を進めた（7月19日～平成25年2月28日）。

Ⅳ 基本層序

I層は浅間A軽石（As-A）を含む表土層・耕作土層、II層は浅間B軽石（As-B）が多く混じる耕作土に相当する。III層は浅間B軽石の純層である。最下位の灰層などユニットが認められないことから1次堆積ではないものと推測される。IV層は浅間B軽石下の黒色土に該当する。V層は暗褐色土で、色調によりa・b層に細分され、b層の方が明るい。VI層は浅間C軽石（As-C）を含む黒褐色土に当たる。VII層はローム層との漸移層で、層位が一定しない。VIII層はソフトローム層で、暗褐色土ブロックが混じり、赤色粒が散見される。IX層はハードローム層で浅間-板鼻黄色軽石（As-YP）が混じる。X層は浅間-板鼻黄色軽石の1次堆積層に相当し、3層のユニットが見受けられた。XI・XII層は粘質のローム土で、XII層がX I層より色調が明るく、白色粒の混入が著しい。



第4図 基本層序



第5図 調査区全体図

V 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

調査区は東西方向に延びる台地の南側に位置し、北から南に向かって傾斜する。ただし、小支谷に隣接することから西側がやや低くなっている。検出された遺構は竪穴住居跡（S I）8軒、掘立柱建物跡（S B）2棟、溝跡（S D）5条、土坑（S K）8基、小穴（P：ピット）20基である。竪穴住居跡はいずれも古墳時代中期に帰属し、東側の2区に集中する。掘立柱建物跡や2条の溝跡（S B-1・2）は奈良時代に比定される。2棟の掘立柱建物跡は並列していた。土坑や小穴も2区に集中する傾向にある。なお、S K-3・4・7～9・13・14は掘立柱建物跡の柱穴に組み込まれたため欠番とした。

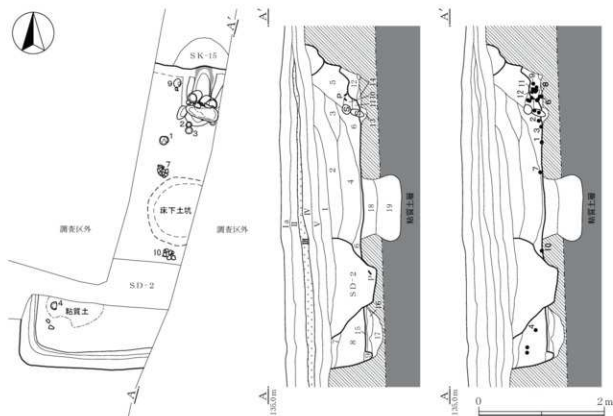
遺物は収納箱（60×44×15cm）で15箱分が出土した。縄文土器・石器・土師器・須恵器・韓式系土器・軟質陶器・陶磁器・石製模造品・白玉が認められる。とくに、奈良時代の円面硯が溝跡（S D-1）から検出されており、遺構の性格を知る上で意義深い。

2 竪穴住居跡

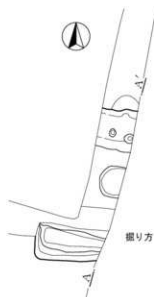
S I-1（第6・7・8・9図、P L 2・9）

形状：方形と推測される。規模：南北4.85 m。主軸方位：N-4°-E。

遺構所見：1区の北東側に所在し、竪穴の東側・北西側は調査区外にかかる。重複する遺構により部分的に

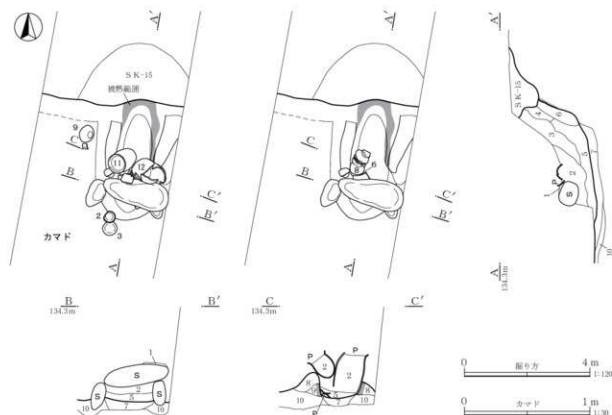


第6図 S I-1 (1)



S I-1 土層説明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。SD-2の1層と共有。
2. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒少量。焼土微量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒多量。
4. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。
5. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土微量。炭化物微量。
6. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒大量。ロームブロック多量。
7. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒微量。ロームブロック微量。
8. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒多量。ロームブロック少量。炭化物微量。
9. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック微量。周溝。
10. 暗褐色土。粘性あり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土ブロック多量。カマド。
11. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。焼土主体。ローム粒少量。ロームブロック少量。カマド。
12. 黄褐色土。粘性あり、しまりやや強。ロームブロック主体。焼土ブロック多量。暗褐色土ブロック少量。カマド。
13. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。カマド。
14. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック少量。カマド。
15. 暗褐色土。粘性あり、しまり非常に強。ローム粒少量。ロームブロック多量。褐色粘質土ブロック多量。掘り方。
16. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。大径のロームブロック大量。掘り方。
17. 暗褐色土。粘性あり、しまりやや強。ローム粒大量。ロームブロック少量。掘り方。
18. 黄褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒大量。暗褐色土ブロック多量で、層状に堆積。床下土壌。
19. 黄褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒大量。床下土壌。



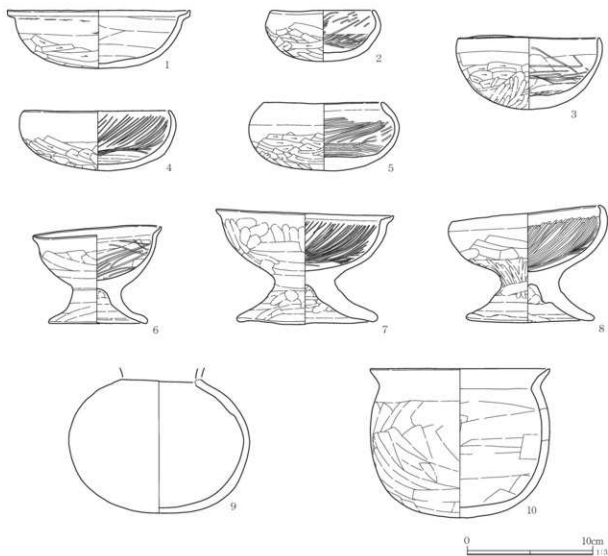
S I-1 カマド土層説明

1. 黄褐色土。粘性あり、しまり強。ロームブロック主体。黒色土ブロック少量。
2. 黒褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック大量。焼土微量。暗褐色土ブロック多量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土ブロック多量。
4. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。焼土・焼土ブロック多量。
5. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。焼土ブロック少量。
6. 赤褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒微量。焼土ブロック大量。掘り方。
7. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。焼土少量。炭化物少量。上位に薄い灰層が堆積。掘り方。
8. 黄褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック大量。焼土ブロック多量。黒色土ブロック少量。袖部。
9. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。焼土多量。袖部。
10. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック部分的に多量。焼土ブロック少量。掘り方。

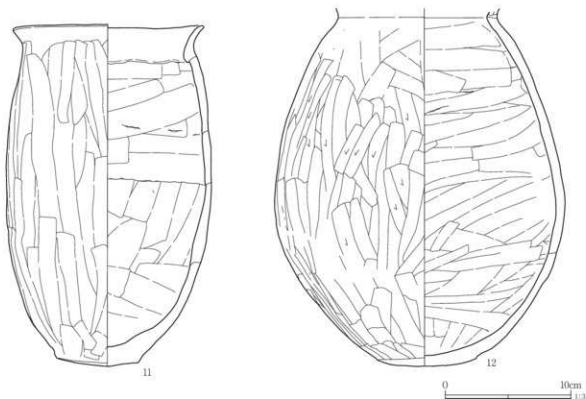
第7図 S I-1 (2)

破壊されていた。SD-2やSK-15と重複し、本遺構がいずれよりも古い。床面は硬化し、堅穴の南側において粘質土による貼り床（15層）が見受けられた。壁際には周溝が巡る。掘り方を有しており、周縁部が帯状に窪む。また、中央に袋状を呈する床下土坑が穿たれ、粘質土層（XI・XII層）に達する。埋没土の1層は重複するSD-2上に堆積しており、SD-2が埋没した古代以降の耕作等に起因するものと推測されよう。カマドは北壁に付設される。袖部が黄褐色土によって掘り方上に構築されており、左袖の基部には黒褐色土が認められた。焚口には芯石や懸架石が据えられている。

遺物所見：検出量は少なく、土師器・高坏・埴・小形甕・甕が認められた。残存状態の良好な個体がカマドや床面上に分布する。カマド内において2個体の甕（11・12）が正位の状態で出土した。その下の左袖部脇には重ねられた状態の高坏（6・8）や甕の胴部片が検出されている。床面上には潰れた坏（1）、高坏（7）、小型甕（10）が散在していた。また、カマド前では形態が近似するものの法量が異なる2個体の坏（2・3）が居並ぶ。カマドの左脇で見付かった埴（9）は著しく被熱していた。掘り方内でも強く内湾する坏（5）が出土した。なお、4・10はSD-2出土遺物と接合している。これらの所産時期は古墳時代中期（5世紀後半）に位置付けられる。



第8図 SI-1出土遺物（1）



第9図 S I - 1出土遺物 (2)

S I - 1 出土遺物観察表

(): 復元値

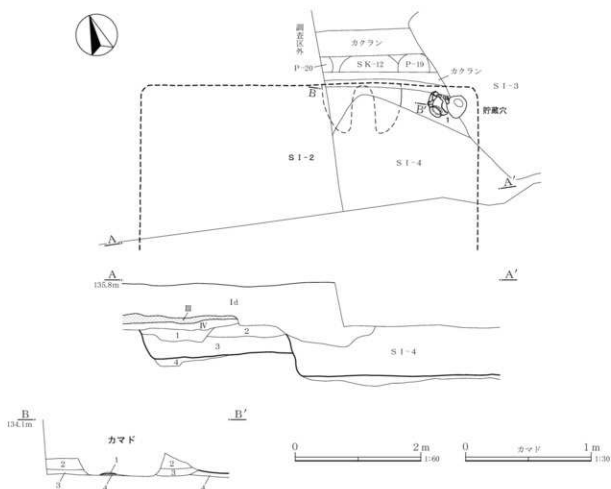
番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	口経: 14.4 底径: - 器高: 4.6	①普通 ②赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④ほぼ完形	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラナデ。	内面黒色処理
2	土師器 杯	口経: (8.0) 底径: - 器高: 4.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
3	土師器 杯	口経: 11.1 底径: - 器高: 5.7	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒 ④変形	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ後ナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。 見込みに十字状のミガキ。	内面黒色処理
4	土師器 杯	口経: 11.4 底径: - 器高: 4.8	①普通 ②にぶい褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部~底部ヘラナデ後斜横位のミガキ。	
5	土師器 杯	口経: 9.4 底径: - 器高: 5.4	①普通 ②褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④4/5	外: 口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部中位~底部ヘラケズリ後ナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
6	土師器 高杯	口経: 10.2 底径: 7.9 器高: 7.8	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、胴部~底部ヨコナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ後斜横位ミガキ、胴部ヨコナデ。	
7	土師器 高杯	口経: 14.1 底径: 11.2 器高: 8.9	①普通 ②にぶい赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④5/6	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、胴部~底部ナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部斜横位のミガキ、胴部ヨコナデ。 指面。見込みに十字状のミガキ。	杯部内面黒色処理
8	土師器 高杯	口経: 11.6 底径: 10.2 器高: 9.2	①普通 ②褐色 ③白色粒 ④変形	外: 口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部中位~底部ヘラケズリ後ナデ、胴部~底部ヨコナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ後斜横位のミガキ、胴部ヨコナデ。	
9	土師器 埴	口経: - 底径: - 器高: -	①普通 ②明赤褐色 ③石英・チャート・角閃石・白色粒 ④口縁部欠損	外: 底部ヘラケズリ。 内: 底部ナデ。	胴部内外面あばた状刺蝟。
10	土師器 小型壺	口経: 14.2 底径: - 器高: 11.8	①普通 ②褐色 ③白色粒・黒色粒 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
11	土師器 壺	口経: 15.0 底径: 6.5 器高: 27.1	①普通 ②褐色 ③角閃石・白色粒・透明粒 ④ほぼ完形	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
12	土師器 壺	口経: - 底径: 7.8 器高: -	①普通 ②にぶい赤褐色 ③白色粒・黒色粒・赤色粒 ④口縁部欠損、胴部~底部5/6	外: 胴部~底部ヘラケズリ。 内: 胴部~底部ヘラナデ。	

S I-2 (第10・11図、PL2・9)

形状：不明。 規模：東西推定5.36m。 主軸方位：推定N-20°-E。

遺構所見：2区の南西隅に所在し、堅穴の西半分は調査区外にかかる。重複する遺構や耕作痕・カクランにより大部分が破壊されていた。S I-3・4やSK-12と重複し、本遺構がいずれよりも古い。床面はやや硬化していた。掘り方を有しており、周縁部が帯状に窪むものと推測される。カマドは北壁の東寄りに付設されるものの、残存状態は劣悪である。SK-12等による上面の削平も加わって、基部の一部のみが残存するに留まった。袖部は黄褐色土によって掘り方上に構築されていたようである。なお、堅穴の北東隅において小穴状の貯蔵穴が認められた。

遺物所見：検出量は非常に少なく、土師器坏片・壺等が認められた。土師器壺(1)は残存状態が良好であり、貯蔵穴脇において崩れた状態で出土した。おそらく、遺棄時には直立していたものと推測される。また、一部の破片はS I-3の掘り方内から検出された。これらの所産時期は古墳時代中期(5世紀後半)に位置付けられる。



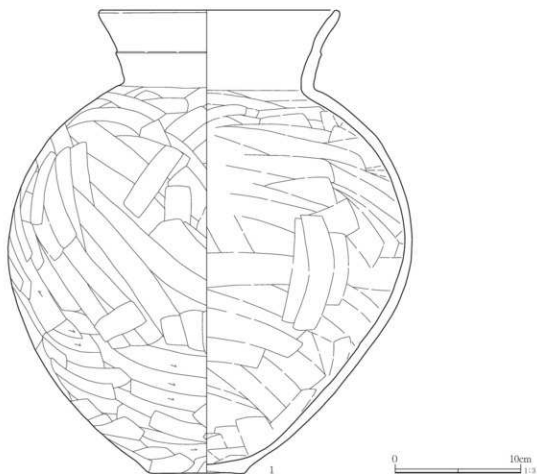
S I-2土層説明

1. 黒色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒微量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒少量。焼土微量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒多量。
4. 褐灰色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック多量。掘り方。

S I-2カマド土層説明

1. 黒褐色土。粘性なし、しまり強。ローム粒少量。焼土多量。
2. 黄褐色土。粘性なし、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック大量。焼土多量。袖部。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒少量。焼土少量。掘り方。
4. 暗褐色土。粘性なし、しまり強。ローム粒微量。焼土少量。掘り方。

第10図 S I-2



第11図 S I-2出土遺物

S I-2出土遺物観察表

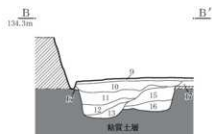
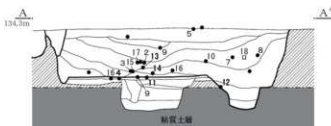
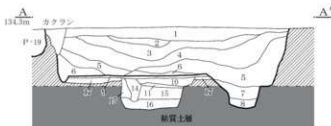
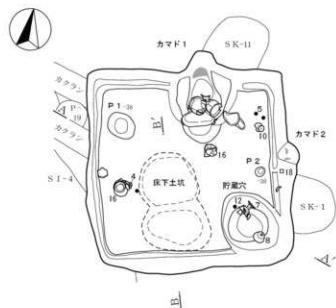
() : 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 壺	口径: 18.7 底径: 7.6 器高: 36.7	①普通 ②明赤褐色 ③片岩・白色粒・赤褐色粒 ④4/5	外: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	

S I-3 (第12・13・14・15図、P L 2・3・10・11)

形状: 方形。 規模: 南北3.25 m × 東西3.34 m。 主軸方位: N-10°-W。

遺構所見: 2区の西側に所在する。残存状態は良好で、深い掘り込みを有する。S I-2・4やS K-1・11と重複し、本遺構がS I-2より新しく、S I-4・S K-1より古い。床面は貼り床(9層)が施され、やや硬化する。壁際には周溝が巡る。掘り方を有しており、堅穴の北東側にやや窪む。また、中央および南側に複数の床下土坑が穿たれ、粘質土層(XI・XII層)に達する。新旧の床下土坑が形成される間に小穴を設けていた様子が断面により観察された(14層)。カマドは2基(カマド1・2)が検出された。カマド1は北壁のやや東寄りに付設される。袖部は、基部および壁際において基盤層の掘り残しを利用し、柱状を呈する締まりの弱い褐灰色土(左袖部)や赤褐色土(右袖部)を芯土とした黄褐色土によって貼り床上に構築されている。また、袖部下には灰屑状の黒色土(10層)が敷かれていた。焚口には芯石や懸架石を据えている。カマド2は東壁中央に付設されるが、被熱する窪んだ壁面が残存しているに留まる。貯蔵穴は南東隅に配され、上端に段を持つ土坑状を呈する。また、北東側にも小穴状の掘り込みが認められた(P 1)。東壁寄り



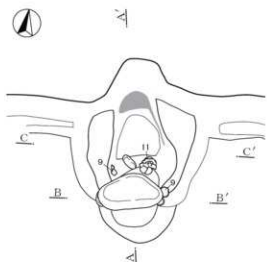
S 1-3 土層說明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒多量。堆土微量。
2. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。堆土微量。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック少量。堆土微量。
4. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。堆土微量。
5. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック少量。堆土微量。
6. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック少量。堆土微量。
7. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック少量。貯蔵穴。
8. 褐色土。粘性やや、しまり弱。ローム粒多量。貯蔵穴。ロームブロックあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック少量。炭化物微量。貼り床。
9. 黒褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒多量。ロームブロック多量。床下土。
10. 暗褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒多量。ロームブロック多量。床下土。
11. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。11層より大径のロームブロック多量。炭化物微量。床下土。
12. 褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック大量。床下土。
13. 黒色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック多量。掘り方内小土。
14. 黄褐色土。粘性なし、しまり弱。ロームブロック大量。堆土ブロックが混じる。床下土。
15. 黄褐色土。15層より暗い。粘性なし、しまり弱。ロームブロック大量。褐色土ブロックが混じる。床下土。
16. 黒褐色土。粘性やや強。ローム粒多量。ロームブロック多量。掘り方。

S1-3カマド2土層説明

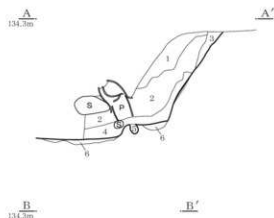
1. 黒褐色土。粘性なし、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土少量。
2. 黒褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒多量。浅黄褐色結實土ブロック多量。貼り床。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土ブロック微量。炭化物微量。掘り方。
4. 黄褐色土。粘性あり、しまり弱。ロームブロック主体。掘り方。

第12图 SI-3 (1)



カマド1掘り方

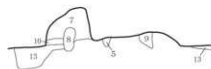
0 カマド 1 m
1:30



B
134.3m



C
134.3m



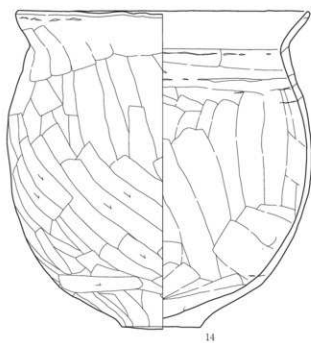
S I-3カマド1土層説明

1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土少量。
2. 黄褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック大量。焼土ブロック多量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒微量。焼土微量。
4. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。焼土多量。
5. 黒褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒多量。焼土多量。支脚痕。
6. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。掘り方。
7. 黄褐色土。粘性あり、しまりやや強。ローム粒微量。ロームブロック大量。焼土ブロック少量。黒色土ブロック多量。袖部。
8. 褐灰色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック少量。Aa-YPが多い。焼土微量。袖部。
9. 赤褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。焼土多量。袖部。
10. 黒色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒少量。焼土微量。繊維質。袖部。
11. 暗褐色土。粘性あり、しまり非常に強。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土少量。浅黄褐色粘質土多量。貼り床。
12. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック多量。焼土少量。掘り方。
13. 暗褐色土。粘性なし、しまり強。ローム粒大量。ロームブロック大量。掘り方。

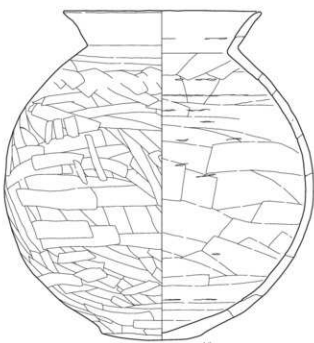
第13図 S I-3 (2)



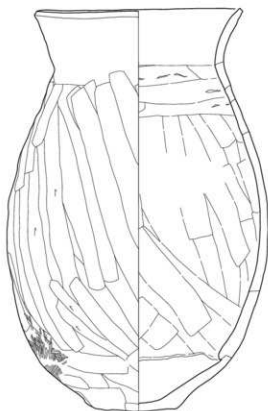
第14図 SI-3出土遺物(1)



14



16



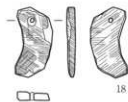
15



17

0 10cm 1/3

0 5cm 1/2



18

第15図 S I - 3出土遺物 (2)

中央の小穴（P2）は出入口施設に関するものと推測される。

遺物所見：検出量は多く、土師器・高杯・埴・小形甕・甕・壺・瓶、須恵器小片が認められた。残存状態の良好な個体がカマド内や堅穴の上層～下層にかけて分布している。カマド内において2個体の甕（14・15）が並立し、15には大型の埴（2）を包蔵する瓶（17）が差し込まれていた。堅穴内の個体は中層に多く、相似する2個体の大型高杯（7・8）や石製模造品（18）等が出土している。床面上で検出された壺（16）は2カ所に分散していた。なお、碎片が接合して復元に至る埴が目立つ（1・4・5）。これらの所産時期は、古代の碎片が混じるものの、主要なものは古墳時代中期（5世紀後半）に位置付けられる。

S1-3出土遺物観察表

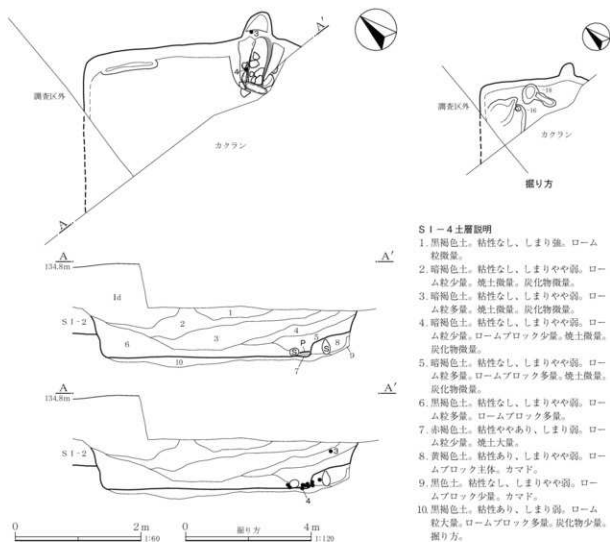
（ ）：復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 埴	口径: (13.9) 底径: - 高さ: 5.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後体部ヘラナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ後体部斜横位のミガキ。	内面黒色処理
2	土師器 埴	口径: 16.9 底径: - 高さ: 7.5	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・赤色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後斜横位のミガキ、底部ナデ。	2次焼成
3	土師器 埴	口径: 10.8 底径: - 高さ: 5.5	①普通 ②にぶい赤褐色 ③白色粒・黒色粒・赤褐色粒 ④4/3	外: 口縁部ヨコナデ、体部上位指頭儀、体部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	
4	土師器 埴	口径: (11.6) 底径: - 高さ: -	①普通 ②にぶい赤褐色 ③白色粒・赤褐色粒 ④1/3	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内: 口縁部～体部ヨコナデ後斜横位のミガキ、底部ナデ。	
5	土師器 埴	口径: 10.8 底径: - 高さ: 5.5	①普通 ②明赤褐色 ③角閃石・白色粒・赤色粒 ④5/6	外: 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部～底部ヘラナデ後口縁部～体部斜横位のミガキ。	
6	土師器 高杯	口径: - 底径: (7.6) 高さ: -	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・赤褐色粒 ④脚部3/4	外: 脚部ヨコナデ後縦位のミガキ。 内: 脚部ヨコナデ。	坏部内面黒色処理
7	土師器 高杯	口径: 21.0 底径: 21.0 高さ: 15.4	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・赤褐色粒 ④4/5	外: 口縁部ヨコナデ後斜位のミガキ、坏底部ヘラケズリ後脚部ナデ、脚部～裾部ナデ後縦斜位のミガキ。 内: 口縁部ヨコナデ後斜横位のミガキ、坏底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。	
8	土師器 高杯	口径: 21.8 底径: - 高さ: -	①普通 ②赤褐色 ③黒色鉱物・白色粒・赤褐色粒 ④脚部欠損	外: 口縁部ヨコナデ後斜位のミガキ、坏底部ヘラケズリ後ナデ。 内: 口縁部ヘラナデ後斜横位のミガキ、坏底部ナデ。	
9	土師器 埴	口径: (9.8) 底径: - 高さ: 11.5	①普通 ②赤褐色 ③黒色鉱物・白色粒・赤褐色粒 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ後縦斜位のミガキ、体部ナデ後縦斜位のミガキ、底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ後斜横位のミガキ、体部～底部ナデ。	
10	土師器 埴	口径: 9.5 底径: - 高さ: -	①普通 ②明赤褐色 ③黒色鉱物・白色粒・赤褐色粒 ④口縁部～体部中位3/4	外: 口縁部ヨコナデ後縦位のミガキ、体部上位ナデ後斜位のミガキ、体部中位ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ後斜横位のミガキ、体部上位指頭儀、中位ヘラナデ。	
11	土師器 小型甕	口径: 11.8 底径: 5.0 高さ: 8.5	①普通 ②にぶい赤褐色 ③白色粒・黒色粒・赤褐色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ、中位～下位ヘラケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部横位のヘラナデ、底部ナデ。	
12	土師器 小型甕	口径: 14.1 底径: 7.0 高さ: 11.4	①普通 ②にぶい赤褐色 ③黒色鉱物・白色粒・赤褐色粒 ④5/6	外: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	
13	土師器 甕	口径: 17.2 底径: (8.7) 高さ: 20.2	①普通 ②赤褐色 ③チャート・白色粒・赤褐色粒 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ後ヘラナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	
14	土師器 甕	口径: 23.0 底径: 6.2 高さ: 25.2	①普通 ②にぶい褐色 ③角閃石・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ヘラナデ、底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	
15	土師器 甕	口径: 16.1 底径: 6.3 高さ: 31.9	①普通 ②明赤褐色 ③角閃石・赤褐色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後下半ミガキ、底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	
16	土師器 壺	口径: 15.6 底径: 7.8 高さ: 26.1	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④3/4	外: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	
17	土師器 瓶	口径: 26.0 底径: 9.4 高さ: 25.2	①普通 ②明赤褐色 ③チャート・角閃石・白色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ～ナデ後縦位のミガキ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後斜位のミガキ、底部ヘラケズリ。	
18	石製模造品	長さ: 3.7 幅: 1.9 厚さ: 0.4 重さ: 5.38g		石材: 滑石 特徴: 勾玉形	

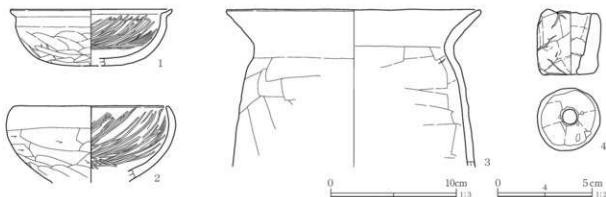
S I-4 (第16・17・18図、PL3・11)

形状：矩形。 規模：不明。 主軸方位：N-50°-E。

遺構所見：2区の南西隅に所在し、堅穴の西側は調査区外にかかる。深い掘り込みを有するが、カクランに



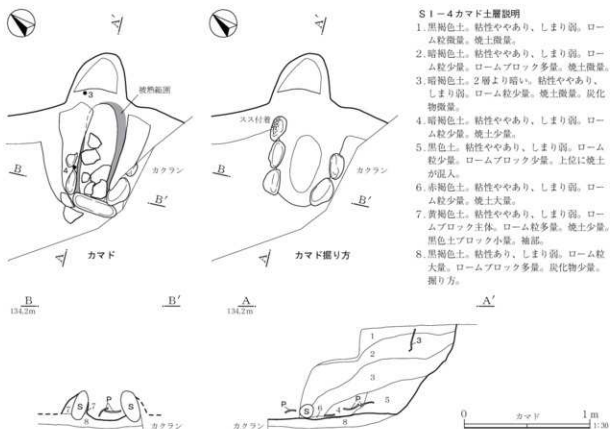
第16図 S I-4 (1)



第17図 S I-4出土遺物

より南側が破壊されていた。SI-2・3やSK-12と重複し、本遺構がSI-2・3より新しく、SK-12より古い。床面はやや硬化し、北東側の壁際には周溝状の掘り込みが一部認められた。掘り方を有しており、浅い土坑状・小穴状に窪む。カマドは北東壁に付設される。袖部は、左側3個・右側2個の棒状隙を芯石とし、黄褐色土によって掘り方上に構築されていた。被覆されていた芯石にススが附着しており、再利用ないし転用が予想される。なお、焚口に崩落した懸架石が残存していた。

遺物所見：検出量は少なく、土師器・甕、ミニチュア土器等が認められた。同一個体に想定される甕の大型破片がカマド内およびその周囲に分布する。また、左袖部の芯石脇からミニチュア土器(4)が検出された。カマドの上位において甕の口縁部~胴部片(3)が逆位の状態で出土しており、焼道に関係するものと推測される。これらの所産時期は古墳時代中期(5世紀後半)に位置付けられる。



第18図 SI-4 (2)

SI-4 出土遺物観察表

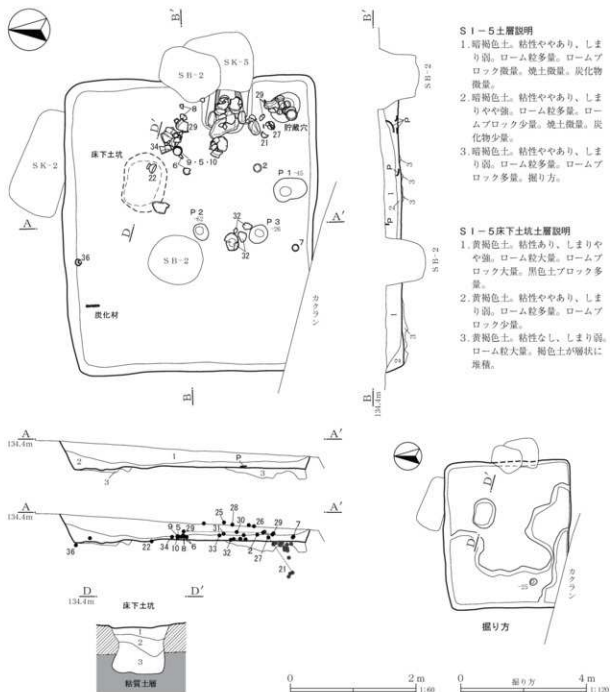
(): 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 環	口径: (128) 底径: — 高さ: 4.5	①普通 ②赤褐色 ③角閃石・白色粒 ④1/5	外: 口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
2	土師器 環	口径: (120) 底径: — 高さ: —	①普通 ②明赤褐色 ③黒色鉱物・白色粒・赤褐色粒 ④1/3	外: 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内: 口縁部~体部ナデ後斜横位のミガキ。	
3	土師器 甕	口径: (200) 底径: — 高さ: —	①普通 ②にぶい黄褐色 ③チャート・黒色鉱物・赤褐色粒 ④口縁部~胴部片	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
4	ミニチュア 土器	口径: 23 底径: 28 高さ: 3.5	①普通 ②にぶい赤褐色 ③白色粒 ④完形	外: 口縁部~底部ナデ。 内: 口縁部~底部ナデ。	底部穿孔

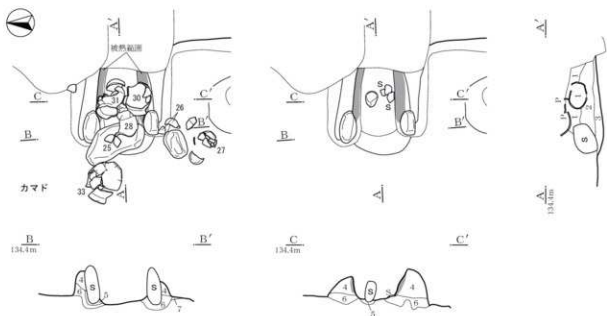
S I-5 (第19・20・21・22・23図、P L 4・12・13・14)

形状：主軸方向に長い方形。規模：南北4.68m×東西4.00m。主軸方位：N-90°-E。

遺構所見：2区の南東隅に所在する。重複する遺構やカクランにより部分的に破壊されていた。SB-2やSK-2・5および小穴と重複し、本遺構がSB-2・SK-5より古い。床面は硬化し、床下土坑部分が若干凹んでいる。掘り方を有しており、堅穴西側の周縁部が帯状に窪む。また、中央やや北東寄りに袋状を呈する床下土坑が穿たれ、粘質土層(XI・XII層)に達する。カマドは東壁の南寄りに付設される。袖部は黄褐色土によって掘り方上に構築されている。焚口に芯石を据え、崩落した懸架石が残存していた。また、石



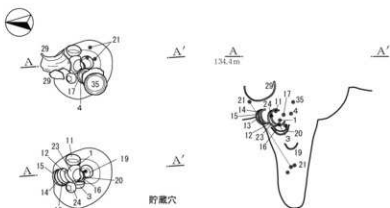
第19図 S I-5 (1)



S1-5 カマド土層説明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック微量。焼土少量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック少量。焼土ブロック多量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック多量。
4. 黄褐色土。粘性あり、しまり強。ロームブロック主体。ローム粒微量。焼土・焼土ブロック微量。黒色土ブロック少量。袖部。
5. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。ロームブロック大量。掘り方。
6. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。ロームブロック多量。掘り方。
7. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。掘り方。

0 カマド 1 m 1:30



S1-5 貯蔵穴土層説明

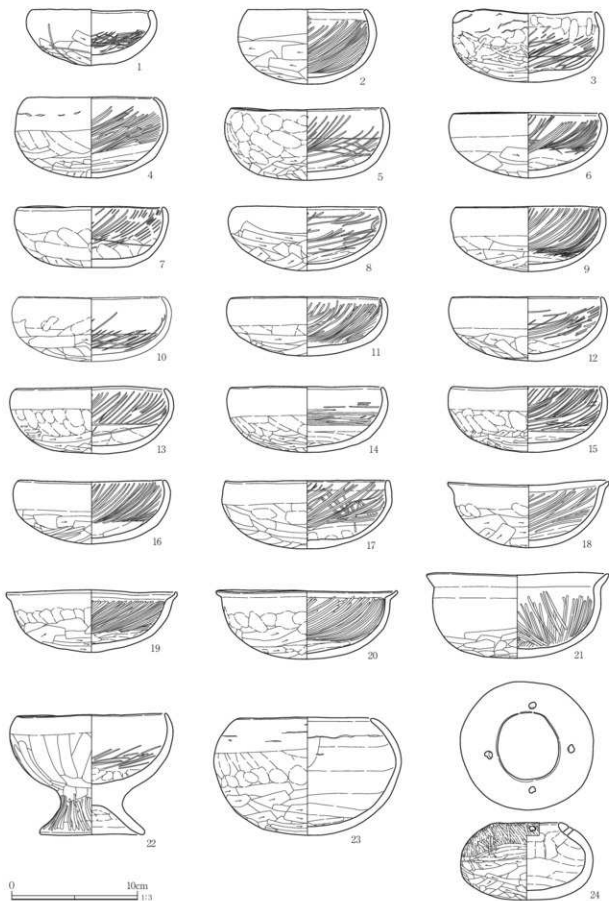
1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。

0 貯蔵穴 1 m 1:30

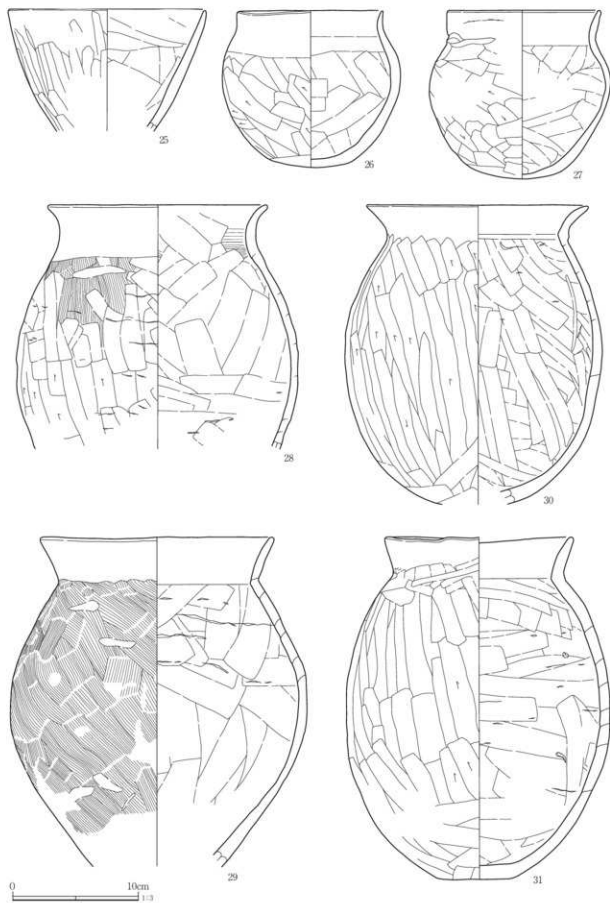
第20図 S1-5 (2)

製の支脚を擁し、その脇には礫の薄片が敷かれていた。貯蔵穴は南東隅に配され、深い小穴状を呈する。また、堅穴中央から南側にかけて3基の小穴（P1～3）が認められた。

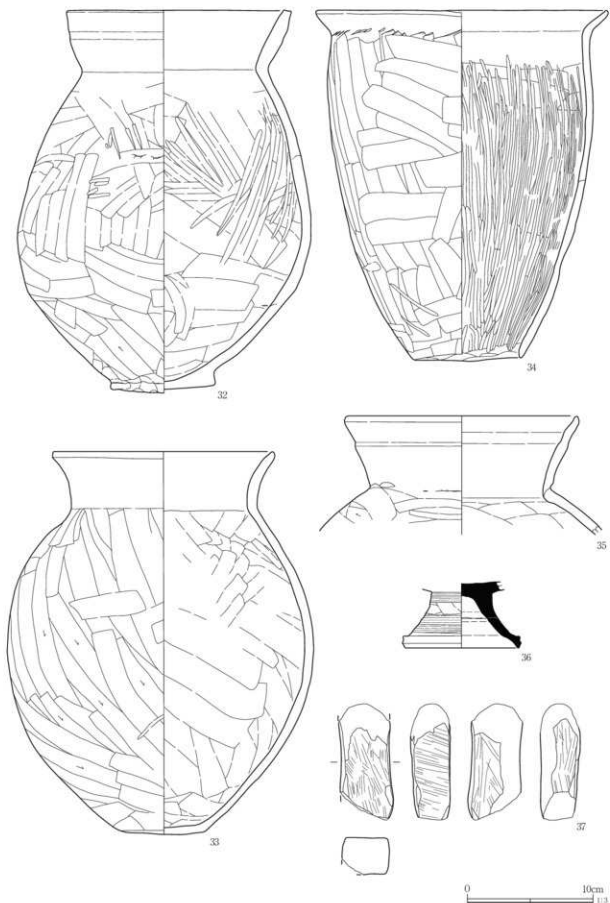
遺物所見：検出量は多く、土師器・高坏・埴・鉢・小形壺・壺・瓶・壺・無頸壺、須恵器高坏、砥石、石英塊が認められた。残存状態の良い好な個体がほとんどを占め、カマドや貯蔵穴とその周辺および堅穴の下層～床面上に分布する。カマドにおいて2個体の壺（30・31）が横位の状態で、貯蔵穴において多量の坏（1・3・4・11～17・19～21）や無頸壺（24）が重ねられた状態で検出された。北壁際の下層から須恵器高坏の脚部（36）や炭化材が出土している。これらの所産時期は、古代の碎片が混じるものの、主要なものは古墳時代中期（5世紀後半）に位置付けられる。



第21圖 S I - 5出土遺物 (1)



第 22 図 S I - 5 出土遺物 (2)



第 23 図 S I - 5 出土遺物 (3)

S I - 5 出土物観察表

() : 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 環	口径: 9.4 底径: - 器高: 4.5	①普通 ②明赤褐色 ③角閃石・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ後ナデ, 十字状のミガキ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。 見込みに十字状のミガキ。	
2	土師器 環	口径: 9.3 底径: - 器高: 5.9	①普通 ②赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	内面黒色処理
3	土師器 環	口径: 10.9 底径: - 器高: -	①普通 ②明赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ後指頭痕・ナデ。 内: 口縁部ヨコナデ・指頭痕, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
4	土師器 環	口径: 9.8 底径: - 器高: 6.4	①普通 ②にぶい赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ後ナデ。 内: 口縁部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
5	土師器 環	口径: 11.9 底径: - 器高: 5.8	①普通 ②灰褐色 ③石英・白色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
6	土師器 環	口径: 11.6 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②にぶい褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④口縁部1.5欠損	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
7	土師器 環	口径: 11.4 底径: - 器高: 4.8	①普通 ②明赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ後体部上ナデ。 内: 口縁部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	内面黒色処理
8	土師器 環	口径: 11.5 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒・褐色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
9	土師器 環	口径: 11.4 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②にぶい赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
10	土師器 環	口径: 11.3 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
11	土師器 環	口径: 12.0 底径: - 器高: 4.6	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	
12	土師器 環	口径: 11.8 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上ナデナ, 体部下半~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
13	土師器 環	口径: 11.7 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②にぶい赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ヨコナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
14	土師器 環	口径: 11.8 底径: - 器高: 5.2	①普通 ②にぶい褐色 ③石英・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後横位のミガキ, 底部ナデ。	
15	土師器 環	口径: 11.7 底径: - 器高: 5.2	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 底部ヘラケズリ。 内: 口縁部~体部ヨコナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
16	土師器 環	口径: 11.5 底径: - 器高: 5.1	①普通 ②褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ後ナデ。 内: 口縁部~体部ヨコナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
17	土師器 環	口径: 12.8 底径: - 器高: 5.4	①普通 ②明赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部~体部ヨコナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
18	土師器 環	口径: 12.8 底径: - 器高: 5.3	①普通 ②褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④4/5	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
19	土師器 環	口径: 13.4 底径: - 器高: 5.0	①普通 ②明赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒・褐色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 体部中位~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
20	土師器 環	口径: 14.3 底径: - 器高: 5.4	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒・褐色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部指頭痕, 底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 底部ナデ。	
21	土師器 環	口径: 14.5 底径: - 器高: 6.7	①普通 ②にぶい赤褐色 ③石英・角閃石・白色粒 ④一部欠損	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上位~中位ナデ, 体部下位~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ナデ後斜横位のミガキ。	外面と口縁部内面被熱により剥落進む
22	土師器 高環	口径: 11.8 底径: 8.3 器高: 9.6	①普通 ②褐色 ③石英・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部ヘラケズリ, 脚部ナデ後ミガキ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ後斜横位のミガキ, 脚部ナデ。	
23	土師器 鉢	口径: 10.4 底径: - 器高: 9.3	①普通 ②明赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④定形	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上ナデ・指頭痕, 体部下半~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラケズリ。	

S I - 5 出土遺物観察表

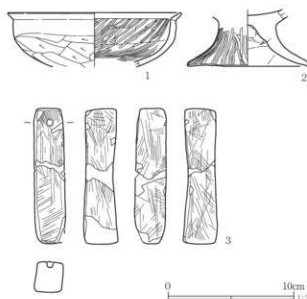
() : 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
24	土師器 無蓋壺	①経: 5.2 ②径: — ③高さ: 6.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・チャート・白色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部~底部ヘラズリ後口縁部~胴部上半斜横位のミガキ。 内: 口縁部ナデ、胴部~底部指ナデ。	口縁部に四孔
25	土師器 小型甕	①経: 15.6 ②径: — ③高さ: —	①普通 ②褐色 ③黒色鉱物・白色粒 ④3/4	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
26	土師器 小型甕	①経: 11.4 ②径: 6.5 ③高さ: 12.5	①普通 ②褐色 ③角閃石・白色粒・赤褐色粒 ④ほぼ定形	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
27	土師器 小型甕	①経: 12.0 ②径: 7.0 ③高さ: 13.3	①普通 ②にぶい赤褐色 ③チャート・黒色鉱物・白色粒 ④5/6	外: 口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラナデ、中位~下位ヘラズリ、底部ナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
28	土師器 甕	①経: (17.3) ②径: — ③高さ: —	①普通 ②にぶい褐色 ③チャート・細砂粒 ④口縁部~胴部上半1/4	外: 口縁部ヨコナデ、胴部上位ハケ目後ヘラナデ、中位ヘラズリ。 内: 口縁部ハケ目後ヘラナデ、胴部ヘラナデ。	
29	土師器 甕	①経: 18.3 ②径: — ③高さ: —	①普通 ②浅黄褐色 ③石英・チャート・黒色鉱物 ④口縁部~胴部下位4/5	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
30	土師器 甕	①経: 17.5 ②径: — ③高さ: —	①普通 ②にぶい褐色 ③チャート・角閃石 ④1/2	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラズリ後ヘラナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
31	土師器 甕	①経: 14.8 ②径: 6.0 ③高さ: 27.1	①普通 ②にぶい赤褐色 ③チャート・黒色鉱物・白色粒 ④3/5	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
32	土師器 甕	①経: (17.6) ②径: 8.2 ③高さ: 30.3	①普通 ②にぶい黄褐色 ③白色粒 ④3/5	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラズリ後ヘラナデ、底部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ナデ。	
33	土師器 甕	①経: 17.4 ②径: 6.8 ③高さ: 20.3	①普通 ②灰褐色 ③片岩・白色粒・赤褐色粒 ④4/5	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
34	土師器 甕	①経: 22.0 ②径: 8.4 ③高さ: 27.8	①普通 ②明赤褐色 ③白色石・白色粒・赤褐色粒 ④5/6	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ヘラミガキ、底部ヘラズリ後ヘラミガキ。	
35	土師器 壺	①経: 18.1 ②径: — ③高さ: —	①普通 ②にぶい赤褐色 ③片岩・赤褐色粒 ④口縁部~胴部上位	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラズリ後粗いヘラナデ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
36	須恵器 高杯	①経: — ②径: 9.0 ③高さ: —	①良好 ②灰色 ③白色粒 ④胴部	外: ロクロ成形後カキ目調整。 内: ロクロ整形。	鉄分噴出
37	砥石	長さ: 9.2 幅: 4.4 厚さ: 3.2 重さ: 171.69g	石材: 流紋岩 特徴: 両端部欠損		

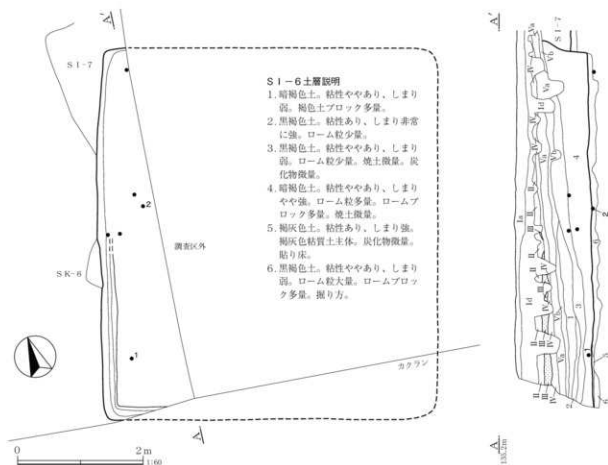
S I - 6 (第24・25図、P L 4・14)

形状: 長方形と推測される。 規模: 南北 5.90 m × 東西推定 5.42 m。 主軸方位: N - 22° - E。
遺構所見: 2区の南東隅に所在する。深い掘り込みを擁するものの、東側の大半は調査区外にかかる。S I - 7やS K - 6と重複し、本遺構がS I - 7より新しい。床面は硬化し、堅穴の南西側において粘質土による貼り床が施される。また、中層に当たる2層も硬化していた。壁際には周溝が巡る。掘り方を有しており、カクラン部分の観察から周縁部が帯状に窪むものと推測される。

遺物所見: 検出量は少なく、土師器・高杯・小形甕・甕、砥石が認められた。これらの所産時期は、古代の砕片が混じるものの、主要なものは古墳時代中期(5世紀後半)に位置付けられる。



第24図 S I - 6 出土遺物



第25図 S I - 6

S I - 6 出土遺物観察表

() : 復元値

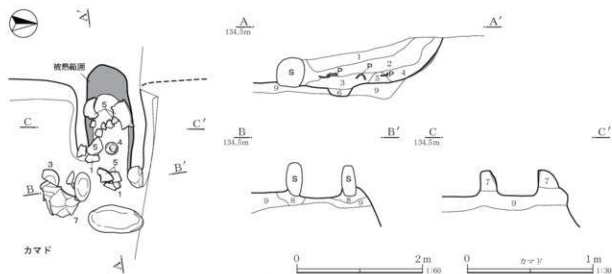
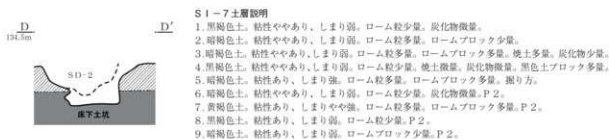
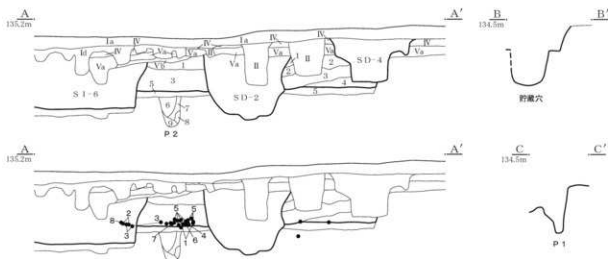
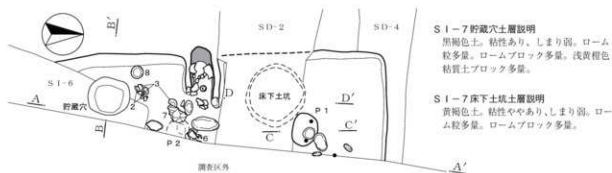
番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	口径: (13.7) 底径: - 器高: -	①普通 ②明赤褐色 ③黒色粒・赤褐色粒 ④口縁部~体部1/4	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ後放射状のヘラミガキ。	
2	土師器 高杯	口径: - 底径: 9.5 器高: -	①普通 ②明赤褐色 ③黒色粒・赤褐色粒 ④脚部	外: 脚部ヘラナデ後縦位のヘラミガキ。 内: 脚部ナデ。	
3	砥石	長さ: 10.7 幅: 2.5 厚さ: 3.7 重さ: 125.13g	石材: 流紋岩 特徴: 上部に一方から穿孔、下端部欠損		

S I - 7 (第26・27図、P L 5・15)

形状: 矩形。 規模: 不明。 主軸方位: N - 91° - W。

遺構所見: 2区の東隅に所在し、東側の大半は調査区外にかかる。重複する遺構により部分的に破壊されていた。S I - 6やS D - 2・4と重複し、本遺構がいずれよりも古い。床面はやや硬化していた。西壁寄りに袋状を呈する床下土坑が穿たれ、粘質土層(XI・XII層)に達する。カマドは西壁に付設され、黄褐色土によって掘り方上に構築されている。焚口に芯石を据え、その手前に崩落した懸架石が残存していた。貯蔵穴は南西隅に配され、土坑状を呈する。主柱穴が認められ(P 1)、加えて、掘り方下においても小穴が検出された(P 2)。

遺物所見: 検出量はやや多く、土師器杯・高杯・台付甕・甕が認められた。残存状態の良い個体がカマド内やその周辺に分布する。カマドの中央において台付甕の脚部(4)が正位の状態で見出され、支脚として使用されていたものと推測される。これらの所産時期は古墳時代中期(5世紀後半)に位置付けられる。

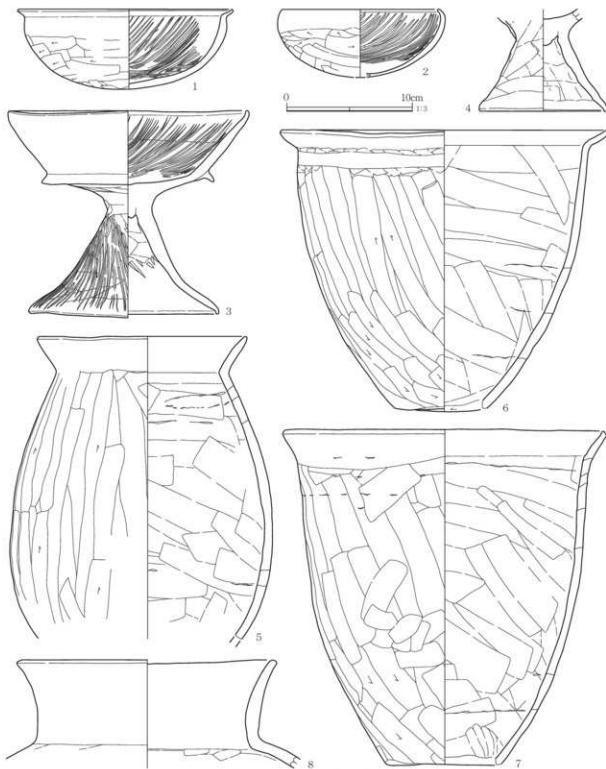


第26図 S1-7

SI-7カマド土層説明

1. 黒褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土少量。炭化物少量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土少量。炭化物微量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。焼土多量。
4. 暗褐色土。粘性あり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック微量。焼土・焼土ブロック多量。黒色土ブロック多量。

5. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。焼土少量。
6. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。焼土少量。
7. 黄褐色土。粘性あり、しまり強。ロームブロック主体。ローム粒少量。焼土多量。袖部。
8. 黒色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土微量。掘り方。
9. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。大径のロームブロック多量。掘り方。



第27図 SI-7出土遺物

S I - 7 出土遺物観察表

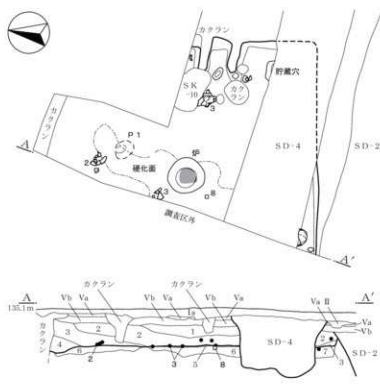
(): 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	口径: 16.9 底径: - 器高: 6.4	①普通 ②赤褐色 ③石英・白色粒 ④ 1/2	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラナデ後斜横位のヘラミガキ。	
2	土師器 杯	口径: 12.4 底径: - 器高: 5.4	①普通 ②褐色 ③白色粒・黒色粒 ④ 3/4	外: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラナデ後斜横位のヘラミガキ。	
3	土師器 高杯	口径: 18.8 底径: 14.9 器高: 16.4	①普通 ②褐色 ③白色粒・黒色粒 ④ 4/5	外: 口縁部~杯底部ヘラナデ、脚部~裾部縦位のヘラナデ後ヘラミガキ。 内: 口縁部ヘラナデ後ヘラミガキ。脚部ナデ、裾部斜横位のヘラナデ。	
4	土師器 台付甕	口径: - 底径: 10.1 器高: -	①普通 ②にぶい赤褐色 ③黒色粒 ④脚部	外: 脚部ヘラナデ。 内: 脚部ヘラナデ。	
5	土師器 甕	口径: 16.4 底径: - 器高: -	①普通 ②にぶい赤褐色 ③角閃石・白色粒 ④口縁部~胴部下位	外: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
6	土師器 甕	口径: 25.8 底径: 7.2 器高: 22.3	①普通 ②褐色 ③角閃石・白色粒 ④ほぼ完形	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	
7	土師器 甕	口径: 25.3 底径: 9.1 器高: 26.6	①普通 ②明赤褐色 ③石英・白色粒 ④ほぼ完形	外: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	
8	土師器 甕	口径: 19.7 底径: - 器高: -	①普通 ②にぶい褐色 ③黒色疵物 ④口縁部	外: 口縁部ヨコナデ。 内: 口縁部ヨコナデ。	

S I - 8 (第28・29・30図、PL 5・16)

形状: 矩形。 規模: 不明。 主軸方位: N - 83° - E。

遺構所見: 2区の北隅に所在し、北東側・西側は調査区外にかかる。重複する遺構やカクランにより部分的に破壊されていた。SD-2・4やSK-10と重複し、本遺構がいずれよりも古い。床面は貼り床が施され、堅穴の中央から西側が硬化する。カマドは東壁に付設される。袖部は黄褐色土によって掘り方上に構築され



S I - 8 土層説明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒少量。焼土微量。炭化物微量。白色粒多量。
2. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土微量。炭化物微量。白色粒少量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土微量。炭化物微量。
4. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック少量。黒色土ブロック多量。
5. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり非常に強。ローム粒多量。ロームブロック多量。貼り床。
6. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒褐色土ブロック少量。掘り方。
7. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒多量。大径のロームブロック多量。掘り方。

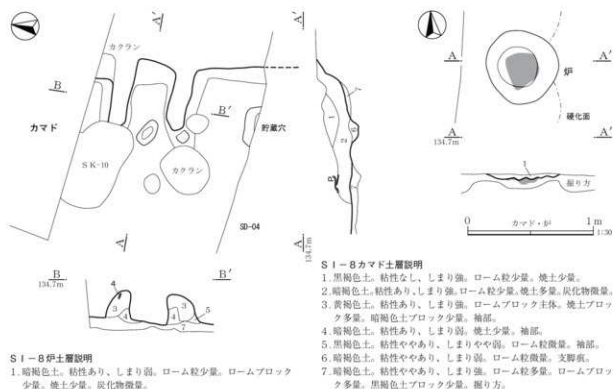
S I - 8 貯蔵穴土層説明

黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。

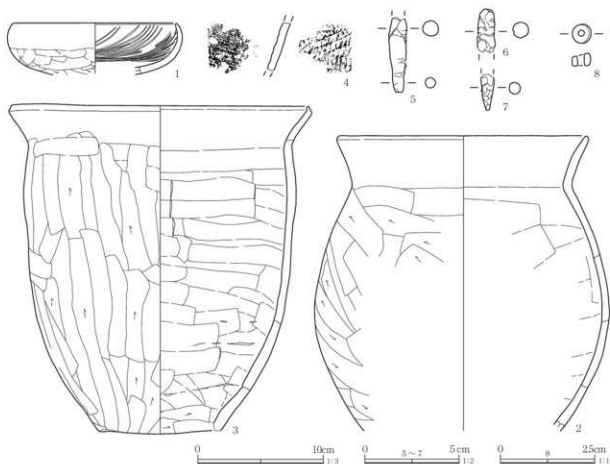
S I - 8 P1土層説明

暗褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒少量。

第28図 S I - 8 (1)



第29図 SI-8 (2)



ており、基部に黒褐色土が認められた。燃焼部で小穴が検出されており、支脚の痕跡に想定される。カマドに加えて、堅穴の中央部で炉跡が見受けられた。覆土を精査したものの、鉄滓等は混入していない。貯蔵穴は南東隅に配されるが、詳細は不明である。貼り床の下からは小穴状の掘り込みが確認された（P1）。

遺物所見：検出量はやや多く、土師器・高杯・甕・瓶、土製品、白玉が認められた。残存状態の良好な個体がカマドの周辺や床面上に散在する。3の瓶はカマド脇と堅穴の西側から出土した破片が接合した。カマドの左袖部内では内面に敲き目のある土師器片（4）が出土している。また、炉内から土製品（5・6・7）、その脇の床面上から白玉（8）が検出された。これらの所産時期は古墳時代中期（5世紀後半）に位置付けられる。

SI-8 出土遺物観察表

()：復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	口径：(128) 底径：— 器高：—	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・透明粒 ④口縁部～体部1/5	外：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半ヘラケズリ。 内：口縁部～体部ヘラナデ後放射状のミガキ。	内面黒色処理
2	土師器 甕	口径：(196) 底径：— 器高：—	①普通 ②にぶい赤褐色 ③片岩・白色粒 ④口縁部～胴部下位1/5	外：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	
3	土師器 瓶	口径：(234) 底径：(96) 器高：26.1	①普通 ②明赤褐色 ③石英・赤褐色粒 ④1/3	外：口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	
4	土師器 (残)	口径：— 底径：— 器高：—	①普通 ②にぶい黄褐色 ③石英・チャート・赤色粒 ④胴部片	外：胴部斜位のハケ目。 内：胴部当て具痕。	
5	土製品	長さ：4.0 幅：1.0 厚さ：0.8 重さ：3.08g		特徴：ナデ整形、一方の端部は欠損	
6	土製品	長さ：2.3 幅：1.0 厚さ：0.8 重さ：2.05g		特徴：ナデ整形、下位は欠損	
7	土製品	長さ：1.9 幅：0.7 厚さ：0.6 重さ：0.71g		特徴：ナデ整形、上位は欠損	
8	白玉	径：0.5 厚さ：0.35 孔径：0.15 重さ：0.14g		石材：滑石	

3 掘立柱建物跡

SB-1

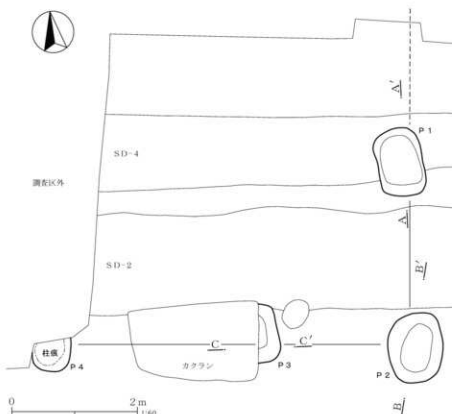
(第31・32図、PL6)

形状：[2間×1間]。

規模：南北残存4.0m
×東西6.52m。

主軸方位：N-8°-E。

遺構所見：2区の北側に所在し、北側・西側は調査区外にかかるものと推測される。重複する遺構やカクランにより部分的に破壊されていた。SB-2と並立する。4基の柱穴（P1～4）が検出され、掘立柱建物の構造を呈する。東柱に相当する部分を丹念に採したものと



第31図 SB-1 (1)



第32図 SB-1 (2)

の、見当たらなかった。P4は調査区の拡張により上面でのみ確認したものだが、柱痕が見受けられた。

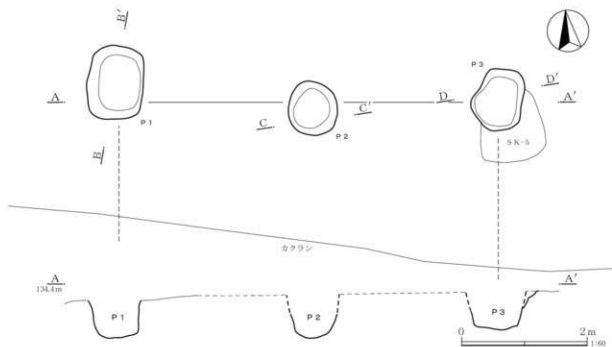
遺物所見：検出量は少ない。いずれも破片で、土師器・須恵器・縄文土器が認められた。P2において検出された須恵器破片は底面にヘラケズリが施されており、古代（7～8世紀）に位置付けられる。

SB-2 (第33・34図、PL6)

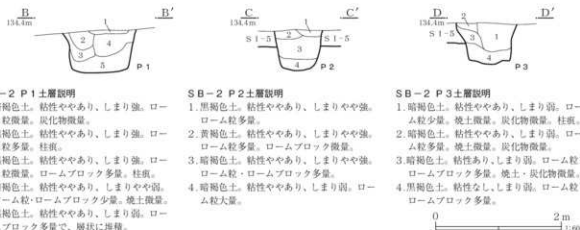
形状：[2間×0間]。 **規模**：東西6.96m。 **主軸方位**：N-7°-E。

遺構所見：2区の南側に所在し、南側は調査区外およびカクラン内にかかるものと推測される。SI-5やSK-5と重複し、本遺構がSI-5より新しく、SK-5より古い。SB-1と並立する。3基の柱穴（P1～P3）が検出され、P1・P3には柱痕が見受けられた。

遺物所見：検出量は少ない。いずれも破片で、土師器・縄文土器が認められた。



第33図 SB-2 (1)



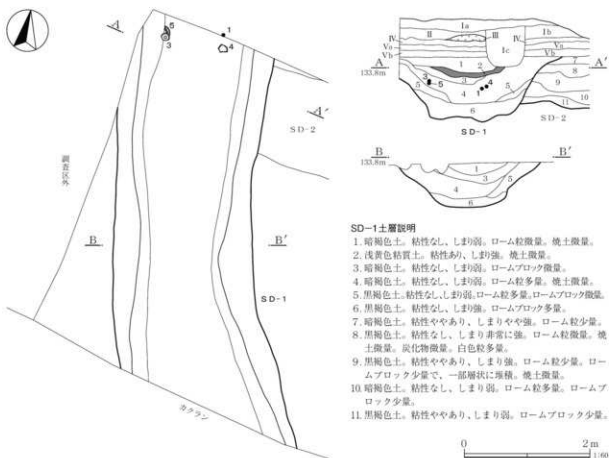
第34図 SB-2 (2)

4 溝跡

SD-1 (第35・36図、PL7・16)

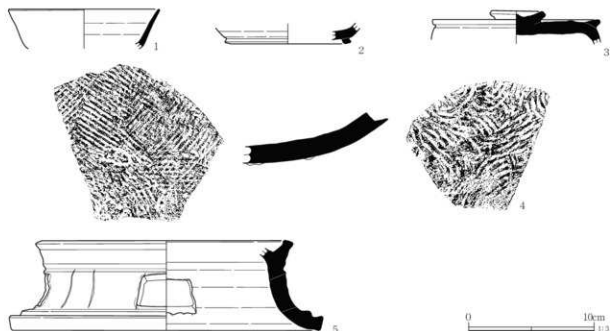
規模：幅214～244 m・深さ1.02 m。 主軸方位：N-5°～15°-W。

遺構所見：1区の西側に所在する。SD-2と重複し、本遺構が新しい。南北に走行し、やや湾曲する。断面は逆台形状を呈する。底面は平坦で、傾斜しない。これらの状況から区画溝としての用途が予想される。



第35図 SD-1

遺物所見：検出量は少なく、土師器片、須恵器杯・碗・蓋・甕、円面硯等が認められた。残存状態の良い有蓋短径壺の蓋（3）や円面硯（5）は北側の中層において重ねられたような状態で出土した。多くを占める土師器片は古墳時代中期に帰属するが、須恵器の所産時期は奈良時代（8世紀後半）に位置付けられる。



第36図 SD-1出土遺物

SD-1 出土遺物観察表

(): 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 杯	口径: (120) 底径: — 器高: —	①良好 ②灰白色 ③白色粒 ④口縁部～体部片	外: ロクロ整形。 内: ロクロ整形。	鉄分噴出
2	須恵器 高台碗	口径: (100) 底径: — 器高: —	①良好 ②灰色 ③白色粒 ④底部片	外: ロクロ整形。 内: ロクロ整形。	
3	須恵器 蓋	天井部: 133 横み径: 40 器高: —	①良好 ②灰白色 ③白色粒 ④天井部 1/3	外: ロクロ整形。 内: ロクロ整形。	
4	須恵器 甕	口径: — 底径: — 器高: —	①良好 ②灰色 ③石英・黒色鉱物・白色粒 ④胴部片	外: 平行タタキ。 内: 同心円当て具痕。	
5	円面硯	口径: (191) 底径: (244) 器高: 7.1	①良好 ②灰色 ③白色粒 ④口縁部～脚部 1/4	外: ロクロ整形。縦刻。台形透かし孔。 内: ロクロ整形。輪積痕。	

SD-2 (第37・38図、P.L7・16)

規模：幅m 1.25～1.63 m・深さ0.65～1.04 m。 主軸方位：N-83°-W。

遺構所見：1区から2区にわたって所在する。SI-1・7・8やSD-1および小穴と重複し、本遺構がSI-1・7・8より新しい。また、SD-1より古いもの、その西側へ延びない状況は時間的懸隔が少ないものと推測される。溝は東西に走行し、直進する。断面は箱薬研状を呈し、東端の底面には細い溝状の掘り込みが認められた。底面の標高は東側が高いものの、傾斜は一定しない。これらの状況から区画溝としての使途が予想される。

遺物所見：検出量は多く、土師器杯・高杯・甕・瓶等、須恵器杯・甕、瓦等が認められた。多量に出土した土師器は重複する古墳時代中期の遺構（SI-1・7・8）より混入したものと推測され、SI-1と接合する個体も見受けられた。須恵器や瓦（3）は破片資料で、所産時期は古代に位置付けられる。



2区

1 区

全体図

1区 個別図

調查區外

A

A

SD-1

調查區外

2区 個別図

調查區外

C

—

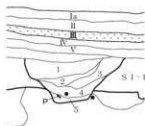
B

E

調查區外

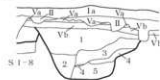


195.2m

 Λ' 

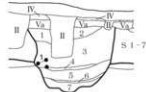
B
136.2m

136.2 m

B'

C
135.2m

135.2 m

C'

全体

11120

11120



第 37 图 SD-2

SD-2セクションA土層説明

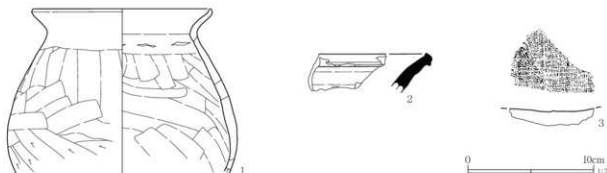
1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒多量。ロームブロック北側に少量。
2. 黒褐色土。色調が1・3層より暗い。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒多量。ロームブロック少量。
4. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック少量で、一部層状に堆積。硬土微量。
5. 暗褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。

SD-2セクションB土層説明

1. 暗褐色土。粘性なし、しまり強。ローム粒少量。ロームブロック微量。炭化物微量。
2. 暗褐色土。粘性なし、しまりやや強。ローム粒多量。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック多量。
4. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック微量。
5. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒大量。ロームブロック少量。

SD-2セクションC土層説明

1. 暗褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒微量。褐色土ブロック多量。
2. 暗褐色土。粘性なし、しまりやや弱。ローム粒少量。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック少量。
4. 暗褐色土。粘性あり、しまり強。ローム粒微量。
5. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒大量。
6. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒大量。ロームブロック多量。
7. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや弱。ローム粒多量。ロームブロック微量。



第38図 SD-2出土遺物

SD-2出土遺物観察表

() : 復元値

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	口径: (14.0) 底径: — 高さ: —	①普通 ②褐色 ③黒色胎土・白色粒 ④口縁部～胴部上半1/3	外: 口縁部コナデ、胴部ヘラクスリ後上位ヘラナデ。 内: 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	2区出土
2	須恵器 甕	口径: — 底径: — 高さ: —	①良好 ②灰色 ③白色粒 ④口縁部片	外: ロクロ整形。口唇下に沈線。 内: ロクロ整形。	1区出土
3	平瓦	長さ: — 厚さ: —	①良好 ②灰白色 ③石英	四面: 布目痕。横骨痕。 凸面: 折組。	1区出土

SD-3 (第39図, PL8)

規模: 幅0.80～0.90 m・深さ0.19 m。 主軸方位: N-76°-E。

遺構所見: 1区の北側に所在する。東西に走行し、断面は逆台形状を呈する。

遺物所見: 1点の土師器片が出土したものの、碎片のため所産時期は不明である。

SD-4 (第39図, PL8)

規模: 幅0.83～1.22 m・深さ0.96 m。 主軸方位: N-88°-W。

遺構所見: 2区の北側に所在する。SI-7・8やSB-1と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。東西に走行し、直進する。断面は上位が開く方形形状を呈し。西側には長方形の掘り込みを擁する。底面はほぼ平坦である。

遺物所見: 検出量は少なく、土師器片、須恵器片、陶器片等が認められた。土師器甕の大型破片が出土した

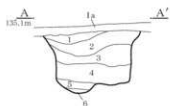
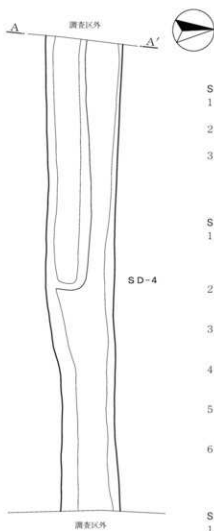
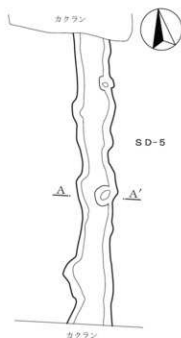
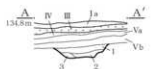
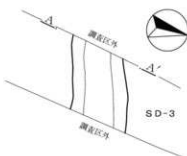
ものの、古墳時代中期の遺構（SⅠ-7・8）から混入したものと推測される。陶器の所産時期は近世以降に位置付けられる。

SD-5（第39図、PL8）

規模：幅0.42～0.78 m・深さ0.12 m 主軸方位：N-9°-E

遺構所見：2区の中央南側に所在する。南北に走行し、直進する。断面は不整形を呈する。底面は凹凸が著しく、北から南に傾斜する。

遺物所見：検出されなかった。



SD-3土層説明

1. 褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。暗褐色土ブロック少量。
2. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック微量。白色粒微量。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック多量。白色粒微量。

SD-4土層説明

1. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック微量。焼土微量。黒褐色土・暗灰色砂ブロック少量。層状のA&B少量。
2. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土微量。黒褐色土・暗灰色砂ブロック多量。
3. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土微量。黒褐色土・暗灰色砂ブロック多量。
4. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。焼土微量。黒褐色土・暗灰色砂ブロック多量。
5. 暗褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック微量。焼土微量。黒褐色土・暗灰色砂ブロック多量。
6. 黒褐色土。粘性あり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック多量。

SD-5土層説明

1. 暗褐色土。粘性あり、しまりやや弱。ローム粒微量。ロームブロック少量。焼土微量。炭化物微量。



第39図 SD-3・4・5

5 土坑

SK-1 (第40図、PL8)

形状：楕円形。 規模：長軸127cm・短軸92cm・深さ27cm。 主軸方位：N-78°-W。

遺構所見：2区の西側に所在する。SI-3と重複し、本遺構が新しい。

遺物所見：検出量は少なく、土師器片・須恵器片が認められた。いずれも小片で、所産時期が判別できるものは古墳時代中期ないし古代に位置付けられる。

SK-2 (第40図、PL8)

形状：長方形。 規模：長軸167cm・短軸80cm・深さ33cm。 主軸方位：N-67°-W。

遺構所見：2区の中央に所在し、SI-5やP-5・15と重複する。

遺物所見：検出量は少なく、土師器片が認められた。

SK-5 (第40図、PL8)

形状：長方形。 規模：長軸[106]cm・短軸95cm・深さ31cm。 主軸方位：N-2°-W。

遺構所見：2区の東側に所在する。SI-5やSB-2と重複し、いずれよりも本遺構が新しい。不定形な掘り込みを擁しており、植栽の可能性が想起されよう。

遺物所見：検出量は僅かで、土師器片・須恵器片・陶器片が認められた。いずれも小片で、所産時期が判別できるものは古墳時代中期・古代・近世に位置付けられる。

SK-6 (第40図)

形状：不明。 規模：長軸[67]cm・短軸[28]cm・深さ13cm。 主軸方位：N-35°-E。

遺構所見：2区の西側に所在し、SI-6と重複する。

遺物所見：検出されなかった。

SK-10 (第40図、PL8)

形状：隅丸長方形。 規模：長軸72cm・短軸[40]cm・深さ80cm。 主軸方位：N-70°-W。

遺構所見：2区の北側に所在する。SI-8と重複し、本遺構が新しい。掘り込みは柱穴状を呈し、南東側に浅い段を有する。3・4層を根固めとした柱痕(1・2層)が見受けられることから、掘立柱建物跡の柱穴である可能性が想起されよう。

遺物所見：検出されなかった。

SK-11 (第40図、PL8)

形状：隅丸長方形。 規模：長軸90cm・短軸[84]cm・深さ19cm。 主軸方位：N-15°-E。

遺構所見：2区の西側に所在する。SI-3と重複し、本遺構が新しい。

遺物所見：検出量は僅かで、土師器片・須恵器片が認められた。いずれも小片で、所産時期が判別できるものは古代に位置付けられる。

SK-12 (第40図)

形状：不明。 規模：深さ38cm。 主軸方位：不明。

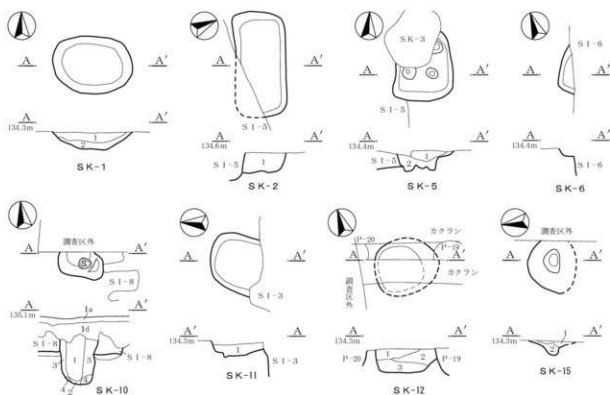
遺構所見：2区の西側に所在する。SI-2・4やP-19および耕作痕と重複し、本遺構がP-19・耕作痕より古く、SI-2・4より新しい。

遺物所見：検出量は僅かで、土師器片が認められた。所産時期が判別できるものは古墳時代中期に位置付けられる。

SK-15 (第40図)

形状：楕円形を呈するものと推測される。 規模：深さ86cm。 主軸方位：不明。

遺構所見：1区の北側に所在する。SI-1と重複し、本遺構が新しい。不定形な掘り込みを擁しており、植栽の可能性が想起されよう。 遺物所見：検出されなかった。



SK-1土層説明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。ロームブロック多量。

SK-2土層説明

1. 暗褐色土。粘性なし、しまりやや強。ローム粒多量。ロームブロック微量。炭化物微量。

SK-5土層説明

1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒微量。ロームブロック微量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック多量。

SK-10土層説明

1. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。ロームブロック微量。柱状カ。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり非常に強。ローム粒多量。ロームブロック多量。柱の当り痕。
3. 暗褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土微量。黒色土ブロック少量。
4. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり強。ローム粒大量。ロームブロック大量。

SK-11土層説明

1. 暗褐色土。粘性なし、しまり弱。ローム粒微量。ロームブロック微量。

SK-12土層説明

1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒微量。焼土少量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒多量。ロームブロック微量。焼土多量。
3. 黒褐色土。粘性ややあり、しまりやや強。ローム粒少量。焼土多量。炭化物微量。

SK-15土層説明

1. 黒褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ロームブロック微量。焼土・焼土ブロック少量。
2. 暗褐色土。粘性ややあり、しまり弱。ローム粒少量。焼土少量。



第40図 土 坑

6 小穴（ピット）（第5図）

20基を確認した（P1～20）。1区から2区にわたって展開し、2区の西側および中央に集中する。定型的な規格・配置を擁するものは見受けられなかった。平面形態は円形ないし楕円形を呈する。長軸長の平均は38cmで、最大52cm（P9）・最小26cm（P15）を測る。深さの平均は31cmで、最大63cm（P4）・最小12cm（P13）を呈する。覆土は黒褐色土（P2・3・5～7・11・14・15・18～20）や褐色土ブロックを伴う暗褐色土（P4・8～10・12・13・16・17）が多く、ロームブロックや炭化物粒等を含む。P1には1層に起源する砂質土が埋没していた。遺物はP-1・2・4・9・14・16～18において僅量の土師器片が出土しており、所産時期が判別できるものは古墳時代中期に位置付けられる。

小穴（ピット）一覧表

遺構名	位置	長径	短径	深さ	備考
P 1	1区西側	48	43	17	
P 2	1区東側	27	25	27	
P 3	2区中央	[48]	37	58	S D-2と重複。
P 4	2区中央	38	34	63	
P 5	2区中央	37	[18]	37	S 1-5・S K-2と重複。
P 6	2区南側	30	[21]	41	S 1-5と重複。
P 7	2区南側	45	21	23	
P 8	2区南側	37	32	20	
P 9	2区南側	52	[44]	13	
P 10	2区中央	43	35	22	
P 11	2区中央	27	26	12	

単位：cm、[]：残存値

遺構名	位置	長径	短径	深さ	備考
P 12	2区南側	40	30	14	
P 13	2区南側	38	34	12	
P 14	2区中央	27	22	32	S K-1と重複し、本遺構が古い。
P 15	2区中央	26	24	26	S K-2と重複。
P 16	2区西側	50	50	50	
P 17	2区西側	44	41	52	
P 18	2区西側	35	30	48	
P 19	2区西側	48	[30]	42	S 1-3・S K-12と重複、本遺構が新しい。
P 20	2区西側	-	-	-	

7 遺構外出土遺物（第41図、P L 16）

表面採集および表土層・カクラン内・該当時期と懸隔する遺構等から出土した遺物を対象とする。検出量は少なく、縄文土器、石器、土師器、須恵器、軟質陶器、陶磁器、石製品、焼成粘土塊が認められた。いずれも小片で、土師器がほとんどを占める。ここでは前節までの遺構出土遺物において掲載することが少なかったものを中心に抽出した。

縄文土器は前期後葉諸磯式・中期後葉加曾利E式・後期中葉堀之内2式（1）、石器は破損した打製石斧や黒曜石片が僅かに検出された。土師器は古墳時代中期のものを主体とし、他に古墳時代前期（2）・後期、古代のものも散見される。また、格子目タタキが施された韓式系土器の破片（3・4）がS D-1から出土した。須恵器は奈良・平安時代（8・9世紀代）のもので占められる。軟質陶器は内耳鍋の口縁部片が1点検出されたに留まった。陶磁器類は肥前系丸型小碗、波佐見系くらわんか碗、瀬戸美濃系半筒型三足香炉・染付ソバ猪口等が見受けられ、17～19世紀に比定される。石製品は白玉（5、滑石製、重量0.16g）や砥石が確認された。



第41図 遺構外出土遺物

VI まとめ

1 竪穴住居跡について

本調査では8軒の竪穴住居跡が検出され、いずれも古墳時代中期（5世紀後半）に帰属する。近在する本遺跡第1次調査地点や七五三引遺跡において当該期の住居跡が検出されており、八幡台地若田支台に展開する集落の動態を把握することができた。

竪穴住居跡に付随するカマドは初現期のものに相当する。S I - 8では炉と併設されており、過渡的な様相が垣間見られた。また、S I - 7の支脚は炉に伴って用いられてきた台付臺の脚部が再利用されており、その機能が類似することは示唆的である。カマドの袖部は黄褐色粘質土によって造出されているが、床下土坑から採取した浅間-板鼻黄色軽石（As-Y P）一次堆積層下の粘質土（XI・XII層）で充当している蓋然性が高い。それはS I - 1・3・5・7において検出された床下土坑がいずれもXI・XII層に達していることや当該層土を掘り採るために断面形が袋状を呈すること等から推し量られる¹⁾。S I - 3ではカマドの作り替えに対応するように複数の床下土坑が認められた。なお、カマド袖部の芯材には石材の他に、締まりのない褐色土・赤褐色土が利用されることがあり（S I - 3）、後世のカマドとは異質な技術が認められる。また、S I - 3のカマド1は作り替えられたにも拘らず壁際にローム土の掘り残しによる基部を擁しており、壁面を少し掘り広げて形成されたことが推測される。この小拡張は溝溝の位置から憶して、カマド構築時に為されたものと予想される。

カマドはいずれも掘り方上に設けられており、床面の形成後に構築された工程が窺われる。これはローム土のみを埋め土とすることになる床下土坑の上層に黒褐色土が多く混じる傾向からも説明でき、ローム土が剥き出しとなった掘り方面に黒褐色土等による床面の構築を施した後で粘質土採取のための穴を穿つことに起因するのであろう。このような経過を辿って、竪穴の中央付近に床下土坑を配するS I - 5では、土坑の部分が見え、かつ他の床面と同じように上面が硬化していた。（高橋）

2 古墳時代中期の出土遺物について

遺構の量比を反映して、本調査において出土した遺物は古墳時代中期後半（5世紀後半）に帰属するものがほとんどを占める。土師器を主体とし、その器種は坏・高坏・埴・小型甕・甕・壺・甗等が組成する。坏は内湾口縁と内斜口縁を呈するものが見受けられ、前者の割合が多い。須恵器の坏蓋を模倣した蓋模倣坏は僅少の破片資料が認められるに留まった。甕には脚部やハケメ調整など古相を残す個体が散見され、西毛地域の特徴を反映したものと解される。S I - 5では須恵器高坏の脚部（第23図35）が大量の土師器と共に床面上で検出された。また、遺構外の破片資料ではあるが、本遺跡第1次調査地点・第3次調査地点や七五三引遺跡でも見られた韓式系土器（第41図3・4）が出土している。

S I - 3からは従来より希少な資料として注目されてきた「三ツ寺型」大型高杯²⁾が検出された（第14図7・8）。当期の典型的な高杯に対して大型で、8は脚部を欠くが、7は全容を捉えることができる良好な資料である。口縁部と坏底部との間に凸帯が巡り、深い坏部の内外面および脚部-裾部の外面にはミガキ調整が施される。胎土は精製されており、非常に丁寧な造りである。これらは竪穴住居跡の埋没がある程度進行した中層において存存状態の良い土師器や勾玉形の石製模造品と共に出土している。

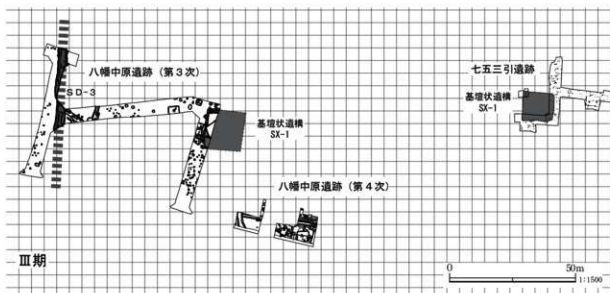
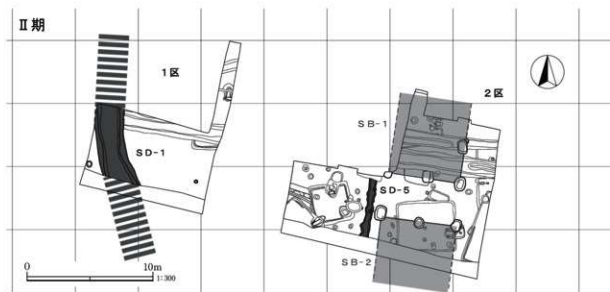
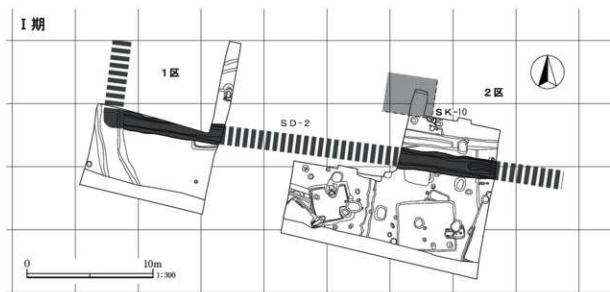
このような高坏が出土した事例として、高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡3)、前橋市元総社明神遺跡V4)、大屋敷遺跡Ⅰ5)が挙げられる。三ツ寺Ⅰ遺跡では首長層の居館跡に係る南濠内の様名-二ツ岳汎川テフラ(Hr-F A、6世紀初頭に降下)層下から出土している。元総社明神遺跡Vのものは17号溝内のHr-F A層下から出土し、やはり居館跡に係る溝と想定されている。大屋敷遺跡Ⅰでは、12号住居跡の上・中層から多量の土師器と共に出土し、住居跡外より流れ込んだ出土状態は本遺跡と類似する。以上の点を踏まえると、大型高坏は古墳時代中期における有力層の居館跡、あるいはこれに係る遺構から出土している場合が多い。また、それらの遺跡地は古来より群馬県内の中核をなす区域に所在し、古代の道ではあるものの、野俣駅(安中市)から群馬駅(前橋市)へ向かう「国府ルート」に沿うように分布することが看取される。八幡中原遺跡の一带は、「国府ルート」と東へと延びる「牛堀・矢ノ原ルート」・「下新田ルート」の分岐点にあり、交通の要衝であったことが指摘されている。こうした視点で見ると、古墳時代中期に古代「国府ルート」に先行する経路が発達し、それを介して大型高坏が分布していった可能性が示唆される。今後は、大型高坏の位置付けと共に、八幡中原遺跡および八幡台地の広域的な関係について解明されることに期待したい。(山本)

3 古代の遺構について

本調査では古代の掘立柱建物跡2棟(SB-1・2)、区画溝2条(SD-1・2)等が確認された。掘立柱建物跡は一部のみの検出であったが、柱穴の平面径が1mを超す大型の構造物であることが予想される。周辺の本遺跡3次調査地点や七五三引遺跡では、礎石建物に用いられるような長辺12~15m程の基壇状遺構や大型礎が確認されている。そして、本遺跡1次調査地点の大集落と基壇状遺構を伴う遺構群を分かつように、幅3.5m程の大溝である3次調査地点SD-3(以下、3次SD-3と呼称)が南北方向に延びる。これは若田文台を南北に挟る谷状地形を利用して両者を区画しており、溝跡より東側には当該期の堅穴住居跡が分布しない。これらの特徴は一般的な集落域とは異なる性格が想起されるところである(第42図)。八幡台地は片岡郡衙の所在地として想定されてきた地域で6)、近年では本遺跡から南400mに位置する八幡六枚遺跡において「片正(岡)郡」の線刻を持つ須恵器甕が出土し、近在するであろう片岡郡衙に伴う資材



第42図 周辺の調査状況



第43図 周辺における古代の変遷

であることが指摘されている⁷⁾。ところが、具体的な検討対象となる大溝や基壇状遺構は検出遺物が少ないことから遺構の性格や所産時期等が不明瞭であった。このような状況下で、本調査において区画溝から円面硯や須恵器が検出されたことなどは重要な手がかりと成り得よう。郡衙域の諸相を具体的に検討する作業は、律令的な国家体制の形成過程を明らかにすることにつながる。以下では遺構の重複関係・配置・主軸方位および出土遺物等を整理し、古代における遺構群の関係と変遷を追っていきたい(第43図)。

SD-1は幅2～2.5m程の区画溝で、南北に走行する。やや屈折しているのは西側の谷状地形による制約が原因するものと考えられる。当遺構から出土した円面硯は郡衙など公的な施設に関与することが予想される。加えて、須恵器・蓋・甕が出土しており、所産時期は奈良時代(8世紀後半)に比定される。これらの遺物は溝跡の中層で検出されており、該期には埋没が進行していたようである。その上層では浅黄色粘質土による硬化した層(2層)が部分的に見受けられ、窪地の状態で往来のあったことが想像される。また、1108年に降下した浅間B軽石(As-B)が上位において水平に堆積している状況は、覆土内においてレンズ状に堆積していた3次SD-3より古い埋没時期が予測される。基壇状遺構はSD-1の延長部分と重複する可能性があると共に外側に位置することから、3次SD-3に対応するものと見做されよう。

SD-2は幅1～1.5m程の区画溝で、東西に走行する。出土遺物から古代に埋没したことが看取されるものの、使用時期は不明瞭でなく、SD-1との重複状況から8世紀後半以前に比定される。また、SD-1より西側に突き抜けない状況は、SD-1構築時にSD-2が意識されていた形跡を示す。こうした様相を鑑みると、SD-2の西端は北に屈曲して建物群を囲繞していたことが見込まれ、SD-1が区画範囲を南側に拡張する際に、従来の南北区画を再掘削して南側に延長したことが予想される。

並列する2棟の掘立柱建物跡(SB-1・2)は非常に近接しているが、形態・規模・主軸方向等が似ており、同時に使用されていた可能性もある⁸⁾。植栽状の区画溝に想定されるSD-5が両掘立柱建物跡に沿っていることからその傍証となろう。これらはSD-2の区画を跨ぐことから同時に機能していたとは考えられず、SD-1の区画に対応することが推測される。なお、SK-10は掘立柱建物跡の柱穴に想定され、調査区の北西側に展開していたものと見做されるが、SB-1と重複し、SD-2の区画内に収まることから、SD-2に対応することが予想される。

これらの状況を総合すると、Ⅰ期：掘立柱建物跡(SK-10)とSD-2による区画、Ⅱ期：並立する掘立柱建物跡(SB-1・2、SD-5)とSD-1による区画の拡張、Ⅲ期：礎石建物の展開と3次SD-3による大区画、の変遷が想定される。掘立柱建物から礎石建物へ変遷すると共に、区画が拡張されていく様相が見出された。なお、住居跡の分布を斟酌すると、Ⅲ期の区画は古墳時代後期から意識されていた可能性もある⁹⁾。もとより、これらの推定は狭い範囲における成果を基にしたものである。大溝に囲われた当該遺跡群の調査は皆に付したばかりであり、その進展と共に検討を重ねていく必要がある。(高橋)

【註】

- 1) その仮定に立脚すると、床下土坑から採取された粘質土は0.10～0.12m程と見込まれる(SI-5・SI-7の事例より算出)。
- 2) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1993『大星敏遺跡1』
- 3) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『三ツ寺1遺跡』
- 4) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987『元総社明神遺跡V』
- 5) 2)と同じ。
- 6) 松田延 2004『上野国片岡郡についての基礎的研究』19 高崎市市史編さん専門委員会
- 7) 石丸敬史・高林真人・清水豊 2011『片岡郡衙に関する遺跡群の報告』『群馬文化』第307号 群馬県地域文化研究協議会
- 8) 掘立柱建物跡は柱穴配置と深度を考慮して2棟が並立するものと見做したが、南側に底を備える1棟の建物である公算も看過できない。底を有する建物跡および並列する事例は共に、佐位郡宇に比定される三軒家遺跡において類別が報告されている。伊勢崎市教育委員会 2007『三軒家遺跡1』
- 9) Ⅲ期としたが、直接重複する資料は検出されていないため、同時に機能していた可能性も存立する。

報告書抄録

フ リ ガ ナ	ヤワタナカハライセキ 4
書 名	八幡中原遺跡 4
副 書 名	宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	高崎市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 303 集
編 著 者 名	高橋清文 山本千春 田口一郎
編 集 機 関	有限会社 毛野考古学研究所 〒 379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 Tel. 027-265-1804
発 行 機 関	有限会社 毛野考古学研究所
発 行 年 月 日	平成 25 年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
やわたなかはらいせき 八幡中原遺跡	ぐままけん たかまし 群馬県高崎市 やわたなかはらいせき 八幡町字中原 1276 番地 4	102020	544	36° 34' 30"	138° 94' 62"	20120618 ～ 20120712	223㎡	宅地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
八幡中原遺跡	集落 官衙	古墳時代中期 奈良時代	竪穴住居跡	8 軒	縄文土器	古墳時代中期の集落跡
			掘立柱建物跡	2 棟	石器	円面硯が出土した奈良時代の
			溝跡	5 条	土師器	区画溝（SD-1）
			土坑	8 基	須恵器	大型の柱穴を持つ古代の掘立
			小穴（ピット）	20 基	韓式系土器 陶磁器 石製品	柱建物跡

写真図版



S1-5 貯蔵穴の調査風景



遺跡全景（上が北）



遺跡全景（南東から）



S I - 1



S I - 1 遺物出土状態



S I - 1 カマド



S I - 1 床下土坑



S I - 2



S I - 2 出土土師器壺



S I - 3



S I - 3 埋没状況



S I-3 遺物出土状態



S I-3 出土石製品



S I-3 掘り方



S I-3 カマド1



S I-3 カマド2



S I-4



S I-4 カマド



S I-4 カマド掘り方



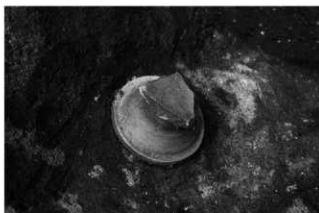
S I-5



S I-5 埋没状況



S I-5 遺物出土状態



S I-5 出土須恵器



S I-5 カマド



S I-5 貯蔵穴



S I-5 床下土坑



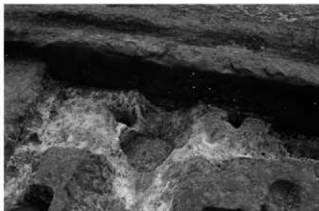
S I-6



S I - 7



S I - 7 カマド



S I - 7 掘り方



S I - 8



S I - 8 遺物出土状態



S I - 8 炉跡



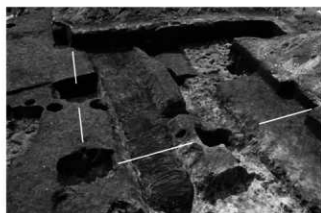
S I - 8 カマド



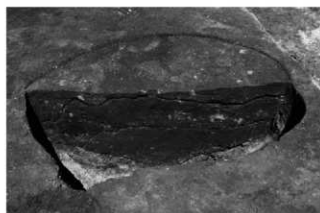
S I - 8 カマド掘り方



SB-1・2



SB-1



SB-1 P2埋没状況



SB-2



SB-2 P1埋没状況



SD-1



SD-1埋没状況



SD-1遺物出土状態



SD-1出土円面硯・須恵器



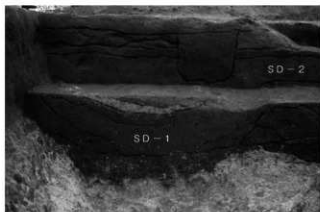
SD-2東側



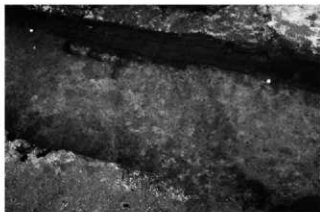
SD-2西側



SD-2埋没状態



SD-1・2重複状況



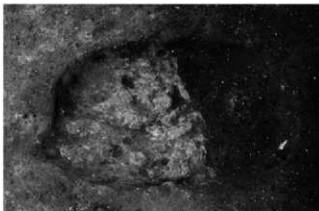
SD-3



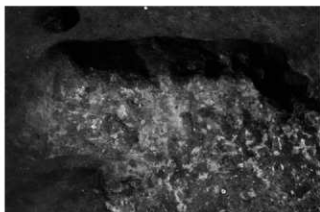
SD-4



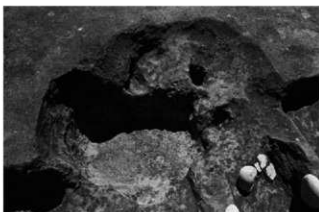
SD-5



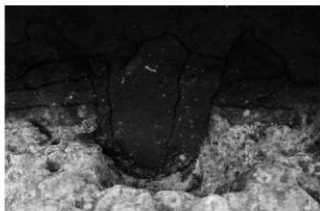
SK-1



SK-2



SK-5



SK-10



SK-11



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



1-11



1-7



1-8



1-9



1-10



1-12



2-1

S I - 1・2 出土遺物

[S = 1/3, 2-1は1/4]



S I - 3 出土遺物 (1)



13



16



14



17



18

S I - 3 出土遺物 (2)

[S = 1/3, 18 1/2]



1



2



3



4

S I - 4 出土遺物

[S = 1/3, 4 1/2]



S I - 5 出土遺物 (1)



25



26



27



28



29



31



30



32



33



34



35



36



37

S I - 5 出土遺物 (3)

[S = 1/3]



1



2

S I - 6 出土遺物



3

[S = 1/3]



1



2



4



3



5



8



6

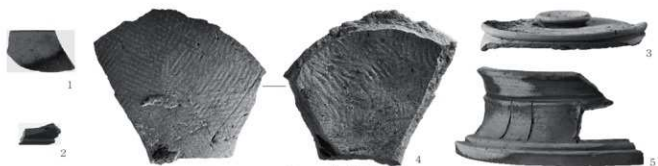


7



SI - 8 出土遺物

[S = 1/3, 4 ~ 7 は 1/2, 8 は 1/1]



SD - 1 出土遺物

[S = 1/3]



SD - 2 出土遺物

[S = 1/3]



遺構外出土遺物

[S = 1/2, 5 は 1/1]

高崎市文化財調査報告書第303集

八幡中原遺跡4

－宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

平成25年2月25日印刷

平成25年2月28日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社
